

## チェルヌイシェフスキーの歴史哲学 (I b)

武井勇四郎

ギゾーに代表される純理派の歴史学が19世紀20年代のフランス社会思想の主流であったとすれば、その同時代に商業主義、産業的自由放任主義に鋭利な鋒先を向けていた批判思想が伏流として流れていた。言うまでもなく、後にエンゲルスが自ら建てた科学的社会主義に対峙させるに「ユートピア」なる名称を付したフランス空想社会主義のそれであり、それは産業組織のサン＝シモンと狂気性の故に当時世間から相手にされなかったフーリエの二大人物によって代表されていた。両者はサン＝シモン主義やフーリエ主義の自らの後継者をつくるも、ルイ＝ブラン、プルードン、デザミ、ブランキといった1848年の激動の舞台の立役者と違い、既に過去の人物となっていた。因みに両者の著作年譜を見るならばこうである、——サン＝シモン『ジュネーヴ人の手紙』(1806)『ヨーロッパ社会の組織』(1814)『産業論』(1817)『組織者』(1820)『産業制度』(1821)『新キリスト教』(1825)、——フーリエ『四運動と一般的運命の理論』(1808)『家族的農業共同体論』(1822)『産業的社会的な新世界』(1822)『産業論』(1835～36)『普遍的統一の理論』(1841～43)。これからも判るようにサン＝シモンとフーリエは19世紀20年代のユニークな批判的思想家であったが、当時必ずしもまともに評価されたのではない。しかし、両者の思想が、バザール、アンファンタン、ピエル・ルルーらによってサン＝シモン主義として、コンシダランらによってフーリエ主義として受け継がれて30～40年代までその尾を引いてかなりの影響力をもっていたことは注目しなければならない。そして極めて興味深いことに、このフランス空想社会主

義は発祥の地に葬られることなく、国境を越えて隣接諸国の革新的思想家の心胸を打ったばかりか、なかでも西欧先進国から最も遅れをとっていた「闇の王国」ロシアにその心酔者、跪拝者を見出したということである。とりわけ、フーリエの思想がペテルブルグの進取的学生や将校の心を魅了したということは、フーリエの基本思想のもつ特殊性とロシアの風土のもつ異質性との共鳴し合ったことを示している。サン＝シモンの思想がロシアの革命的インテリゲンチヤの心情をとらえるにはあまりにもロシアの後進性に比して産業的でありすぎて、いわゆるロシアの「風土」に適合し得なかったが、それに対して、フーリエのそれはえらく農業本位的に映って〈ロシア的共同体的〉土壌に吻合するものと夢想されたのである。貴族出身のオガリョフとゲルツェンは、早くも30年代初頭にサン＝シモン主義者アンファンタンの解釈になるサン＝シモンの教理に接してそれに共感を見出し、つづいてフーリエの『産業的社会的な新世界』を読み、フーリエ主義、これこそ無論、社会主義の問題を何よりも深くあばいた、とゲルツェンをして言わせしめた。コンシダランの『社会的運命』(1847)や彼の編集になる“La Phalange”誌は、40年代ロシアの知識人サークルのなかで回覧されかなりの読者を獲得していたことは、ロシアの社会主義思想の発生にとって重大な意義をもっていたことを意味している。もとをただせば、ロシアのインテリゲンチヤはフーリエやサン＝シモン、また彼らの後継者によって初めて〈社会主義思想〉なるものを教えられたのであって、1845—49年のペトラシェフスキー会によるフーリエ教理のロシアへの移植までは、ロシアには社会主義という名のつく社会主義は何一つとしてなかったのである。ロシアにおける社会主義思想の確立は、言うまでもなく、1848年のフランス革命の敗北を契機として西欧資本主義諸国よりもむしろロシアに革命の聖地を見出したゲルツェン提唱の〈ロシア型〉社会主義に求められる。そしてこのロシアの色彩の強い〈社会主義〉の確立の時は50年代初頭である。学生チェルヌィシエフスキーの世界観形成にはゲルツェンのこの社会主義は直接の影響を及ぼしていない、そのことは、ゲルツェン自身が1847

年に既に西欧に亡命して青年チェルヌィシェフスキーは彼と何の一面識も持っていないことから、また、何よりもゲルツェンの社会主義の論著を全く読んでいる節がないことから判る。むしろ学生チェルヌィシェフスキーがフーリエの思想と接しそれに大きな意義を認めるのは、ゲルツェンやオガリョフらを通してのものではなくて、フーリエ教理の心酔サークルともいえるペトラシエフスキー会の特定の人間を通してのそれであった。この点でペトラシエフスキー会の思想的性格と学生チェルヌィシェフスキーのこの会のメンバーとの親交とそのかわり合いを概括しておくことが、チェルヌィシェフスキーのフーリエ思想の受容の性格を究明するのに不可欠である。

ロシア思想史のなかに位置づけてペトラシエフスキー会の思想的性格を大雑把に述べるなら、この会はメンバーのほとんどがフーリエや、フーリエ主義の思想（彼らにとっては教理に近い）に情情的に共感・共鳴し、それをロシアに定着させたという功績を担うものであるが、フーリエのファランジュやファランステールの観念の実現をロシアのオプシチナやミール制度に求めたことを別とすれば、とりたててフーリエの根本思想を改造し、ゲルツェンの如きロシア色の濃い社会主義に理論的に練り上げたものではない。そしてまたペトラシエフスキー会はロシア思想史上、社会主義思想の先駆をなしはするが、しかしフーリエやフーリエ主義の学習・宣伝に終始し、社会変革のための社会運動を志向したものでは決してなく、フーリエの思想を感覚論的人間学やせいぜいのところ社会哲学にとどめおいたものである。したがってこの会はデカプリストのような社会運動の秘密結社ではなく、フーリエの著作の読書討論会の、いわば思想研究会の性格を強くしていた。会員の顔ぶれも多彩であった、会の主人公 M. B. ペトラシエフスキー、フーリエ教理の煽動・喧伝家 A. B. ハヌィコフ、H. A. スペシネフ、A. A. アルシャルモフ、『マルサスと彼の反対者』（1847）『イギリスとフランスにおけるプロレタリアと社会的窮乏』（1847）『人民の富および政治経済学原理試論』（1847）の論文を発表していた自由主義的経済学者 B. A. ミリューチン、A. И. エヴロペウス、

H. M. デプー、後にスラヴ主義者に転向し『ロシアとヨーロッパ』(1871)をものす H. Я. ダニエレフスキー、そしてこの会の事件と切っても切れない文豪ドストエフスキー、詩人 A. H. プレシチュエーフと言った面々で、30名以上を超えたといわれる。そして彼らには急進派も保守派もあってフーリエ教理の統一的解釈に欠け、概してフーリエの熱狂的集団の観を呈した、ゲルツェンの『ロシアにおける革命思想の発達について』(1851)によれば、ペテルブルグこのサークルはフーリエ主義を実現可能と空想していた実行的な秘密結社であるとされているが、「秘密結社」と特徴づけることは正確でない。この会がどんな思想の集団であったかを知るよすがとして首領のペトラシェフスキーの活動と思想をスケッチしておこう。彼が読み耽った著作はフーリエの後継者とも通俗者とも目されるコンシダランの『自然的・魅力的教育論』(1844)やフーリエの原著であった、これをいわば下敷にして彼は『ポケット外国語辞典』(第2巻、M項からO項の中途まで約200頁にのぼる。1846年刊)を出版した。何百項目かの中で彼はフーリエのソチエテール社会主義、自然的全面的教育、両性の完全な平等、自由恋愛、人間情念、共同体における労働組織に強い関心を示し、そしてフーリエの教理を楯に用いてロシアの専制政治と農奴の経済に批判の鋒先を向けている。ペトラシェフスキーは一応フーリエの情念論を受け容れそれを自然法に裏付けられた人間本性(人間性)に解釈し直し、これを哲学の原理にしている。フーリエと同様に商業や産業的自由主義は人間の本来的な情念を押し殺し、人間を富や経済的自由の手段に畸型化していると同見做し、この情念の完全なる解放を共同体のなかに求めている。それにはまず人間の知的発達が先決問題であって、先入観念の除去、宗教的偏見の払拭、そしてルソー流の自然的教育の提唱。この点では18世紀の感覚論的唯物論に与し、そして出版の自由、裁判制度の改革、農奴制の廃止による民主共和制の樹立といった啓蒙思想にも与している。何よりも彼はフーリエの魅力ある労働組織に惹かれ、ロシアの農奴的な不快な強制労働を廃棄することによって生産力を高めると同時に人間の情念を十分に解放できるものと考え

ていた。ロシアの歴史家グラノフスキーがロシアを西欧化することによってロシアの近代化をはかるが、それにはまず知的啓蒙、知識の普及、近代合理主義の受容を重視し、そしてスタンケヴィッチらもシェリング、フィヒテ、ヘーゲルの哲学に傾倒して理性主義ないしは哲学的啓蒙を説いたが、それらに対してペトラシェフスキーはフーリエ主義+改革=啓蒙主義でロシアの近代化を計ったと言えよう。後に論及することになるが、30年代のスタンケヴィッチ会にはドイツ哲学はあったが、社会主義の片鱗もなかった、ペトラシェフスキー会にはフーリエの社会主義はあったが、ドイツ哲学の影は薄かった、ただフランスの感覚論哲学が人間学として底流していたにすぎない。ゲルツェンとオガリョフに至って初めてフランスの社会主義とドイツの哲学(ヘーゲル)は融合を遂げ、それが青年マルクスやモーゼス・ヘスとは違った融合の形態をとって〈ロシア型〉社会主義の誕生をみるのである。ペトラシェフスキー会はスタンケヴィッチ会の如き専ら純哲学的議論に終始しないで、人間の解放を社会と結びつけていた点で、フーリエの教理を多少なりとも社会哲学として受け容れ初めていたのである。このため1848年の革命はペトラシェフスキー会の一部のメンバーを急進化させる動力因ともなり、П. Н. フィリップポフの『十戒』、Н. П. グリゴリエフの『兵士の対談』(共にペトラシェフスキー事件直前の作)で専制政治を痛烈に批判するまでに至らしめる。1849年4月22日のペトラシェフスキー事件前に、ドストエフスキー、スペシネフ、モンベルリらによってペトラシェフスキー会と別に革命のための〈秘密結社〉が企図されたとも言われている。しかしペトラシェフスキーもその会のメンバーもフーリエの社会哲学を独自にロシアの変革の理論に作り直すまでに至らぬうちに、4月22日の逮捕によってこの思想研究会はあえなく潰えてしまった。ところでここで注目しておかなければならないことは、ペトラシェフスキーがフーリエのファランステールの構想をロシアに現存していて農業生産の基盤をなしていたオブシチナと同類と見做し、このオブシチナ(農村共同体)においてフーリエの構想の実現が十分可能であると考えたこ

とである。ゲルツェンの『過去と思索』によれば、最初のフーリエ教理の崇拜者は И. П. Гарахов (1809~1849)で、ゲルツェンは彼に触れてこう述べている、——ファランステールの、できあがった組織、強制的な制度、そしてある程度兵營的な秩序は、批判的な精神をもった人々のなかに同情を喚び惹くことはないにしろ、真理を乳母のように手をとってあやしてくれることをほとんど涙を流さんばかりにして頼きっていて、疲れきった人々を、強く惹きつけることは疑いない。フーリエ主義は一定の目的をもっている。労働、しかも共同の労働である、と。一般的に言って、スラヴ主義者はミール制度をギリシャ正教と国民性に結びつけて讚美し、ピョートル大帝以前の古代スラヴ民族の共同体的生活を崇めたのに対し、革新的な思惟する40~50年代のインテリゲンチヤはフーリエのファランステールと残存しているミール制度を結びつけてロシア的な農民社会主義を夢想していたのである。ペトラシェフスキー会はこの後者の路線のロシア思想史における始元に当たっていると行って大過ない。

さてここでチェルヌィシェフスキーのフーリエ思想の出会いとペトラシェフスキー会員ハヌィコフとの関係について論及しておくのが時宜に適っているよう。1848年11月、この時までには学生チェルヌィシェフスキーは主としてギゾーの著作を読み耽り、Débats 紙を通じて反動化を強めてゆくフランスの動向を追っていた。すでにこの頃にはペトラシェフスキー会も1848年の2月革命、6月鋒起に刺激されてフーリエ思想の急進化に迫車をかけ、メンバーの思想傾向も左右に分派し一部のメンバーは自国ロシアの専制政治と農奴制にきびしい批判を加え始めていた。丁度その頃の11月下旬のある日チェルヌィシェフスキーが聴講後に、フーリエを「我が師」、その思想を「我が学問」「我が教理」と崇めたてまつり、専らフーリエの教理の喧伝と宣伝に情熱を燃していたハヌィコフなる人物につかまった。この人物との出会いが学生チェルヌィシェフスキーのフーリエ思想との出会いを決定づけたのである。猛烈な情熱的なフーリエ心酔者ハヌィコフは、新しい観念、新しい思想、新しい

理論を懸命に探しあぐんでいた学生の彼に、いきなりフーリエの基本観念を吹きこんだ、——フーリエは12の根情念とそれらの複合の発見者だ、彼はこの情念を人間人格の基本としている、彼は事を抽象的次元にとどめずに農業組合を通してその情念の自由な解放が可能であるとした、自らその実現を試みたのだが二三家族しか一緒に居住できなかつたので失敗に終わったのだ、と。ハヌィコフのフーリエ思想のこの鼓吹の説明内容からみて彼のフーリエ研究のほどが十分にうかがえるものである。チュルヌィシエフスキーは、この煽動的なロシアのフーリエ主義者に最初かなり強い不安を覚えたようで、彼とのつき合いを止めるか、それとも自らフーリエ主義者に転ずるか、と日記に告白している。これからみるとハヌィコフの彼への衝撃は相当のものであったと察せられるのである。実際、一週間もたたぬうちにチュルヌィシエフスキーはもう日記にこう書いているのである。——ハヌィコフは頭のよい信念に固い博識家だ、おれはどうも彼との関係では生徒みたいだ……彼はおれに“phalange”の四号を貸してくれた。後で手写しておこう……ハヌィコフは非常に愛想がいい、おれに新しい一般的観念（フーリエ主義だけを言っているのではない、一般的にだ）を教えてくれた。猛烈な宣伝屋だ。しかし、信念とするところは平和的手段によってだ。……おれは今彼を尊敬している、確信を持ち、燃ゆるような心の持主の人を尊敬するみたいに、と。実はこのハヌィコフ（1825～53）は彼より三つ年上で、ペトラシエフスキー会に出入りし、ペトラシエフスキー、スペシネフと並んで当時最も左翼的なフーリエ心酔者の一人であったのである。このハヌィコフとの出合いの五ヶ月後にはペトラシエフスキー事件が起るが、その直後にチュルヌィシエフスキーはこの事件に関して、「もしもうすこしこの結社が存続していたなら参加したろうに」と述べている、このことから推して、彼が直接この会に出入りして学習したり意見を交わしたりした節は見当らないし、またペトラシエフスキー事件に連座した逮捕者の誰一人の供述書にもチュルヌィシエフスキーの名は挙っていない。しかし、この会に名をつらねていた作家 H. M. デブー、フ

ーリエ主義を雄弁に講義した後のスラヴ主義者 H. Я. ダニレフスキー、パンフレット『十戒』(秘密出版)で農奴制を痛烈に皮肉った П. Н. フィリップフ、ラムネーの『一信者の言葉』(1834)を翻訳してドゥロフのサークルで朗読した A. П. ミリュコフ(チェルヌィシェフスキーは彼の『ロシア詩史』(1848)を読んでいる)と彼は面識を持っていたし、また間接的にこの会と接触していた同郷の先輩にして同じ大学の歴史哲学科の出身者 И. И. ヴヴェジェンスキー(1813~1855)とハリコフ大学の学生で同じ大学に顔を出していた彼の無二の親友 B. П. ロボドフスキーと親交を結び、とりわけヴヴェジェンスキーの研究会の常連であったことは注目しなければならない。このようにチェルヌィシェフスキーは直接ペトラシェフスキー会に入入りしていなかったにしろ、十分にその会に支配していた知的雰囲気を呼吸していたと言えるのであり、ハヌィコフこそチェルヌィシェフスキーとペトラシェフスキー会とのパイプ役をかってでたすぐれた人物であった。ハヌィコフは彼に“phalange”〔正しくは、“La phalange, journal de la Science Social” フーリエ主義者の雑誌。当初(1836~40年)は隔週、後コンシデランが編集長(1840~43年)週刊、更に“Democratie Pacifique”日刊紙が肩代り(1843~51年)]につづいて、フーリエの晩年の作“Théorie de l'Unité universelle”(『普遍的統一の理論』1841~43)を貸し与え、更につづいて、このことは大変重大な効果をもつことになったが、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』とヘーゲルの『法哲学』をも貸し与えたのである。ところでこれらの書物はハヌィコフ個人が所有していたものではなく、当時ペトラシェフスキー会がニコライ I 世が禁じていた西欧の進歩的著物を片端からこっそり取り寄せ禁書の共同文庫を作っていたその中のものであった。この文庫に次の主要な著作があったことは、ロシア社会・哲学思想上注目すべきことであろう。フーリエの全集、ルソー、コンシデラン、カベールの著作、ルイ＝ブランの『10年史』、プルドンのほとんどの著作、俗流経済学者バスタアの諸著作、ベンサム全集、ピエール・ルルーのほとんどの著作、ラムネーの『一信者の言葉』『基本法』、エ

ルヴェシウスの『精神論』『人間論』、ロックの『人間悟性論』、ジョルダノー・ブルーノ、スピノザ、ライプニッツ、ホッヴス、ボルテール、ディドロの諸著作、コントの『実証哲学講義』、更に興味深いことにマルクスの『哲学の貧困』、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』までであった。(序いでに言えば、ベリンスキーは独伝年誌で『ヘーゲル国法論批判』に目を通したが、チェルヌィシエフスキーは彼の実質的な活躍期間中(1857~1862)マルクスやエンゲルスの著作は全く知らなかった。シベリヤ流刑中には『資本論』を知る機会もあったと推定されている。)

ではこの文庫の何冊かの中核的著作を学生チェルヌィシエフスキーに貸し与え、彼の座標定位と初速度形成に決して無視しがたい影響力をもったハヌィコフなる人物とはいかなるフーリエ思想の持主であったのか。彼は何の著作も遺さなかったが、ペトランシェフスキー事件の三週間ほど前に催されたフーリエ生誕記念会食の夕べの席での講演が言い伝えられている。この講演の前半にはハヌィコフ自身の見解がフーリエの教理とおりませられて開陳されている。ハヌィコフによれば、世界の改造は地球と人間との両方の改造からなり、前者は地球の表面、内部、水利系、気候を人間の有利になるように全面的に体系的に、同胞的に再配置することによって行なわれ、後者は感性的情念、精神的情念、倫理的情念を新たに発見された類〔的共同体〕、ロシアの制度でいえばオブシチナ制度において全面的に解放し発達させることによって遂行される。無論、ハヌィコフは前者の自然改造よりも、人間改造に重点を置いて、人間の情念の現在のあり方をルソー流の原始状態と比較している。人類の原始状態では人間の情念とそれを満足させる環境とがバランスがとれていた、衣食住にたいして土壌と気候と水利とはうまく配置され、男性と女性と子供の人口構成はほどよく、猛獣もいなく病気もなく、人間の均整も体格も美しく性の謳歌にも不自由ない、そして私的所有もなければ未来にたいする宗教的不安もなかった。しかし、人類はその原始状態から遠ざかり、貧困もまし、ただ幻想や想像がかきたてられるばかりで、物質的要求・

欲求の面での感性的情念の不満が、麻痺した感性による精神的情念の不満が、主権の面での道徳的情念（徳操）の不足がつのり目立った。ハヌィコフによれば、この不満の原因は専制政治の伴づれともいえる奴隷根性、宗教、無知蒙昧であり、これらがいわば自然法に基づく情念（自然的感情）にかげりを与え、それを消滅させ、圧殺したのである。ツァーリの掟、領主の掟、キリスト教の掟が人間の自由な情念の解放と発達と満足と抹殺したのである。彼はフーリエと同じく、ブルジョワ的家族制度を自由な性の謳歌の抑圧とみて、家族制度を専制、特権グループの支配、情念の調和破壊、独占、無道徳性、淫乱、神的迫害者、強欲な悪党の巢窟、富の排他的所有と利己的分配、人類の健康の破壊、病毒、伝染病、悪の権化とした、そして最後にこの家族制度に依って建つ国家は害毒におかされた有機体であるとした。フーリエと同じく（特にハヌィコフはフーリエの『普遍的統一の理論』を用いている）、歴史の発展を未開、家長制、野蛮、文明の遷移とし、ルイ＝ブラン、プルードン、ピエル・ルルーも、フランス国民議会左派の解する社会主義も、共産主義も、ドイツ急進主義も決した最終的学理の表明ではなく、むしろフーリエの言う調和と組合こそ人類の最終目標であり、従来の歴史的遷移を幸福の絶頂への移行期の諸時代と見做した。ここでとりたてて指摘しておかねばならないことは、ペトラシエフスキー同様に、ハヌィコフも自然法の立場に立ち、現代文明をもってこの否定とみたことである。彼によればこの否定を表明する一つの法則が様々な形態をとりながらも全歴史を貫ぬいている、すなわち勝利者と敗北者とのアンチノミーの法則、——東洋ではカスト間の闘争によって、ギリシャでは民衆と<sup>デモス</sup>貴族との闘争によって、ローマでは<sup>プレグス</sup>平民と<sup>パトリキア</sup>貴族との闘争によって、中世では自由な人格と権威との、分離派教徒間の、新興階層や諸党派間の農民および生産共同体と家臣との闘争によって、現代においてはプロレタリアと資本家との闘争によって表明されている勝利者と敗者とのアンチノミーの法則なのである。ここには多分に1848年の革命によって急進化した煽動家ハヌィコフの階級闘争の見地も見られる。ペトラシエフス

キー事件直前(1849年4月22日)の彼の見地が、友人チェルヌィシェフスキーにどれほどの重みをもって作用したのかは一概に断定しにくい。彼がハヌィコフと初めて合った四ヶ月前の当初は、彼の「信念とするところは平和的手段によってだ」と評しているところからみて階級闘争の見地を表だして表明していなかったかもしれない。ハヌィコフ自身この階級闘争の見地を貫徹してもいない、というのは、ハヌィコフによればいままでの歴史にこの否定の法則と勝者と敗者とのアンチノミーが貫流していたにしろ、この否定の法則の中性化ないし廃棄はフーリエの調和的教理においてのみ可能であり、その教理の原理とするところは普遍的調和、普遍的自由と幸福であって決して否定の思想や闘争の思想ではないからである。ここにチェルヌィシェフスキーがハヌィコフは「平和的手段」の持主であると評した所以もあろう。従来の歴史が自然法の否定であるなら未来の社会は、この自然法の再生であり、それには理性と産業と芸術という人類の世紀的な試煉と創造形成が不可欠なものとされる。ハヌィコフはフーリエと違って理性と産業を未来社会のための基幹とした。ハヌィコフの考えでは、現代の本質的な特徴は理性と産業(実践)の相互作用であり、純然たる抽象のなかにとどまることを拒否する理性が、合法的軛を容認しない全哲学の持前の独立不羈と自由と相俟って、広い意味の実践や(産<sup>インダストリー</sup>業)の舞台にいままでになくはげしく登場して、個々の人間や全社会に作用することである。産<sup>インダストリー</sup>業の発達<sup>アソシエーション</sup>は現代の一大特徴をなす、黄金の未来、黄金の時代であり、理性の諸原理に貫ぬかれることによって、物質的領域に同一の均衡、諸力の同一の連<sup>アソシエーション</sup>合(組合)を見出す。一口で言えば、理性と産業の相互浸透から、人間の未来社会が拠って立つ新しい指導原理がでてくるのである。ハヌィコフはフーリエを「我が教師」、その学理を「我が教理」とであると揚言するが、決して単なるフーリエ思想の同語反覆者ではなく、フーリエが断乎拒絶した18世紀の啓蒙的理性とそれによる産業をむしろ未来社会の一大ステップとして正当に受け取ったのである。チェルヌィシェフスキーは、ルイ＝ブラン、プルードンを信奉者にしたが、フー

リエをその数に入れず、当初からかなり批判的であった、例えば、諸情念が普遍的法則にかなっていて調和にのみ向うというのは真理をうがっているが、12の根情念というのは12音階に似てそのため工案された節がある、そして工案者はホラ吹きに違いない、と評している。

それはさて置き、ここで注目しなければならないことは、ハヌィコフはペトラシェフスキー同様に、フーリエの組合制度や類的共同体としてのロシアのオプシチナ制度に着眼していることである。彼はこの講演の中でもオプシチナ制度や血縁村落体や逃亡農民コミュニオンを「産業的および市民的生活の揺籃の地」と評価し、フーリエのフェアランジュの構想がロシアの土壤において実現可能であると吹聴している。ハヌィコフにとってはこのロシア固有の古い制度が人間の情念とそれを満足させる環境との見事な調和および均衡として映じたのであろう。後述するようにチェルヌィシエフスキーは未来社会の母体としてオプシチナ制度を〈生産者=所有者=受益者〉の同胞体として積極的に評価しそれを吸い上げているので特にこの点を銘記しておかなければならない。

ハヌィコフのこの講演の後半はフーリエの系列法則の説明に当てられているが、彼はフーリエの体系はただフランスの国民性の表現に尽きず人類の名において普遍的に適用可能でかつ、現存の事物の秩序と全く対立する思想体系と見做すが、しかし現在の大多数の蒙昧とアパシーにあってはその実現は時期早尚であると判断している。しかし新観念の実現にはたくましいかつ執拗な闘争が必要であって、信仰や祈禱にでなく、行為と苦難において全世界の津々浦々での大同団結があれば、「毒された国家の破壊は近い」「変革は近い！」と講演を勇ましく結ぶ。無論、この最後の言葉だけでもハヌィコフはペトラシェフスキー事件に連座し、死刑を宣せられるに十分すぎることであったろう。以上がチェルヌィシエフスキーの友人ハヌィコフの人間像である。

チェルヌィシエフスキーはこの如き人物ハヌィコフを初めとして、幾人か

のペトラシエフスキー会員フリッポフ、デブーらと親交を結んでいたがため、彼はフーリエ思想の受容とその批判をかなりスムーズに行ない、自身は決してフーリエ心酔者にもならなかったし、フーリエを信奉者にも立てなかったのである。彼は“La phalange...”を読み進むうちに、まず農業協同組合の思想を全く正当なものと評価し、ペトラシエフスキーも関心のほどを示した le travail attrayant (誘引的労働) にかなり強い興味を抱いた、つづいて当時禁書の筆頭になっていたフーリエの原書『普遍的統一の理論』(1841~43)を人目を避けてこっそり読み耽り、日記にこう読後感をもらしている、——まるで中世やロシアの分離派教徒の神秘的な書き物を読んでいるようなもので、奇怪さは底なしだ、ゴーゴリの狂人日記の議論の感じだ、それにしても大部分は理にかなった思想だ、フーリエはわれわれにいくばくかの新思想を宣言した最初の人だ、人はこの思想を馬鹿げたものだとしているが、おれは断然合理的なものとする、未来はこの思想のものだと確信する、例えば、現今の商業の害悪に至ってはしかり、と。チュルヌィシエフスキーは当初からフーリエに対して冷静な態度で臨み、彼の根本観念と彼の本のもつ表面上の狂気性、奇矯さを巧みに篩で分けた。日記におけるこの態度は彼の活動の第二期に属する『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』(1856)の中にも明確に現われている。40年代のドイツ哲学とフランス社会主義の融合者としてゲルツェンとオガリョフとおそらく自分チュルヌィシエフスキー自身についてふれながらこう述べている、——当時、フランスでは魂の抜殻みたいうんざりする経済学者の学説〔セイ、バステアの俗流経済学〕への対蹠物として、国民福祉の新しい理論〔フーリエの学説〕が発生した。新科学を鼓吹した諸観念はいまだ幻想的な形で述べられていた。そして先入観にとらわれ利欲にかられた反対者らにとっては、彼らの気にくわぬ体系を嘲笑に付すことはいともたやすかった。彼らは新理論家〔フーリエ〕の健全な高邁な根本的諸観念に目をくれず、一般にどの学問も最初は避けて通ることのできない空想的な狂気の沙汰をおおげさに囃し立てた。だが、しかしこの体系の見かけの奇矯

さと幻想的狂気のなかに、深遠にして稔り豊かな真理が隠されていたのである。大多数の学者連中も、西欧の政論家も、経済学者の偏頗な表面的な風評を信じて、新科学の意味を理解しようと欲しなかった。すべての人は突拍子もないウトピーと嘲け笑い、ほとんど誰一人それをまともに虚心担懐に研究する必要を認めなかった、と。いずれにせよ学生チェルヌィシエフスキーの脳裡にフーリエの基本思想は極印された、しかし彼が第二のペリンスキーとしてロシアの文芸評論活動に身を入れたために、差当ってはこの思想は表立っては顕われず、彼の第三期(1857~62)の活動に托され、『共同体所有に反対する哲学的偏見の批判』(1858)『経済学活動と立法』(1859)『迷信と論理規則』(1859)『資本と労働』(1860)『「ミル経済学原理」露訳およびその評言』(1860)のなかでフーリエのフェランジェの構想は歴然とたち現われる。この期の彼の歴史哲学とフーリエ思想とのかかわり合いについては追って論及することにしてるのでここでは立入らない。ただ何故フーリエの思想がロシアのインテリゲンチヤの心胸を打ったかを検討するためにフーリエの代表作である『四運動』(1808)に若干触れておくのが都合がよい。このことはとりも直さず、ロシアの社会的経済的現実と西欧先進国のそれとの対比を供することにもなるう。

『四運動』に貫ぬく基柱は、18世紀啓蒙主義哲学者が「理性」なる冷徹な原理を根拠にして実現したフランス革命たるものが、そしてそれによって誕生した近代「文明」社会たるものが、実は貧困、失業、詐欺、海賊行為、自由放任、商業独占、奴隷収奪、財産相続等々といった悪と不幸の合理化と実現化以上の何ものでもなかった、という「文明」の社会批判であった。フーリエにとってはこの「理性」の原理に立つ文明産業の社会は、商業的産業的(資本主義的)不統一と不調和のカオス以外の何ものでもないのに、啓蒙主義の哲学者と古典経済学者には社会の最終的にして合理的な理想社会、文明の華として受けとめられた。一方ではフーリエは、冷徹な理性、計算づくの理性に対するに、フランスの哲学史に底流として流れ長い間等閑視されてき

た情念の哲学、つまりフランス感覚論哲学を再興し、他方では、商業的独占、自由放任主義的社会に対するにルソー的自然状態に原像をもつ、階級闘争なき普遍的調和の支配する小生産単位、つまり農業協同組合をもってした。この点でフーリエの思想は、情念引力説を哲学的原理とし、無政府的生産を否定する搾取なき農業的共同体を社会理念とする一種の社会哲学であり、現存の不合理な社会、闘争の文明社会を根柢から批判すると同時に未来社会を構想したものである。フーリエは彼持前の狂気的表現と奇矯さを弄して未来社会の創造過程の順序を数学的級数を用いて定め、人類8万年を前半の幸福の絶頂に向う上昇振動期と後半の破壊的消滅の下降振動期とに分けている。そして前半の上昇期を更に16の級数的階梯に分けて1. 混成セクト (自然状態), 2. 未開, 3. 家長制, 4. 野蛮, 5. 文明, 6. 保証, 7. 粗成セクト, 8. 単純結合セクト, 9~16, 調和的・普遍的統一 (理想社会) とした。勿論フーリエの当時の社会の位置づけは5の文明である。彼によると当時のロシアは4の野蛮と5の文明の混合社会で、歴史的発展からみれば、西欧先進国より遅れている、しかし、いずれはロシアもこの数学的級数の階梯を昇りつめる。彼が理想社会として描いた単純結合セクトの社会組織が、かの有名なフェランステール、一定の地域に住みつき800~1200人の家族集団を生産単位にして、魅力ある労働による土地耕作を主とする小生産農園——農業協働組合——である。ここでは一定の生産手段の共同所有による非商業的・非産業的性格の強い自然的自給自足的経済が営なまれ、共同食堂等々の共同生活が行なわれる。フェランステールは、もとをただせば古代ギリシヤの密集軍団や古代マケドニアの方陣形の陣営組織であるフェランジュに由来するものであり、多彩な累進セクト、集団系列から作られて農耕、製造、学問、芸術に従事する。ところで、組員相互を結びつけているものは、フーリエによると諸情念引力である、これはニュートンやライプニッツによって解明された物質的引力にアナロジーが求められ、物質界にも精神界にも共に通じ、つまり社会的運動、動物的運動、有機的運動、物質的運動の四つの運動に通ずる統

一原理である。これはちょうど万有引力が全世界を支配している如く、人間の精神界、感性界を支配し、過去・現在・未来にわたる歴史のデミウルゴスであり、富と快樂への愛、各人が生まれつき自然から賦与された情念の謳歌、近代ブルジョワジーが打ち出した商業的・營利的利己主義、経済的私利私欲ではなくフランス感覚論哲学が打ち出した自然的感性的欲求である。フーリエが考えていた12の根情念とは、5つの感官欲（五官的物質的情念、奢侈欲）、4つの単純魂欲（名誉、友情、恋愛、家族）、3つの複合魂欲（噛み合せ、変化、段階づけ——社会の普遍的統一欲）であり、この3つのグループに奢侈性、集団性、系列性の性格と数的級数づけを与えた。かてて加えて13番目の情念としてフーリエは結合秩序においてのみ可能な情念——調和性——をも工案していた。このような情念の級数化をチェルヌィシエフスキーが12音階のために工案されたホラと評しているのもまことにまともである。しかし、彼は決して情念という概念の哲学的意味を否定したのではない。フーリエによれば、ファランステールにおいてはこれらの情念は完全に解放され、自由恋愛はもとより、文明によって不具化・畸型化された労働の形式は解消し、ルソー流の自然的教育と自由な人格の形成が可能である。また魅力ある労働と、生産の計画化によって生産性は高まり、もろもろの情念は十二分に満足させられ、他方、政治の面では管理はあるが、政治的権力と支配のない文字通りのアナキーの社会が実現されるのである。ファランステールには寄生者も非生産者もないし、破産、投機、買占め、高利、過剰生産、商人の過剰、商業的放縦、無政府の競争、奸策、闇取引、策謀、詐取、詐欺、海賊の一味、——一言でいえば *laissez faire, laissez passer* のもたらす諸悪と諸害の一切がない。ここにはロシア的農奴制と専制もなければ、西欧的な自由放任による産業的弊害のいずれも欠如している。

「最も不幸な国、最も奴隸的な国ロシア」(ゲルツェン)は、フーリエの言葉でもって表現すれば農奴農民を土地に緊縛し強制労働を唯一の生産形態とする「貴族封建制」であり、もしつづく歴史の級数的階梯を進むとすれば、

西欧型の文明社会——つまりアダム・スミスが提唱していた「商業的封建制」「産業的封建制」に行きつくことは必至である。ロシアは、質組合と投機売買、経済的自由競争、とことんまで追求される冷徹な計算による理性主義が支配し、道徳の面からみれば厚顔無恥と瞞着、醜悪な強奪、詐欺的醜行に充ち満ちた西欧の文明社会に走るべきか、それともこの「産業封建制」を回避するロシア独自の道はありえないのか。フーリエのファランステールの構想は自国ロシアの暗黒に光をもたらそうと思ひ悩み、西欧文明の弊害に嫌悪の情をもっていたインテリゲンチヤに、一つの希望を懐かせるに十分であった、とりわけ近代産業の再編成を企画したサン＝シモン主義と大きく違って、フーリエ主義は農業的性格が色濃かったがため後進農業国ロシアにとって何か吻合する如き観を呈していた。フーリエのこの構想は、まさに、ロシアの母なる大地に残存し、ロシア国民、スラヴ人の心衷の奥深くに偉大なる良俗として保存されていた制度に、適用の可能性が十分にあるように誰しも想像した。土地制度(オブシチナ制度)においても、ロシア農奴農民の相互保証的、同胞的意識や習慣においても、すぐにでも受容可能の如くに見え、これがロシアを救済する唯一の講じられ得る手段の如くに思えたのである。直接生産者が土地所有者にしてかつ生産物の直接の受益者でその間にいかなる支配と搾取の媒介環もないというフーリエの提唱する小生産単位の類的共同体が、また彼が結合セクトへの道を開くものとして評価していた相互扶助、友愛、博愛の精神で行動していたフリーメソンの小集団の共同体が、思惟するロシアのインテリゲンチヤにとっては、ミール制度、オブシチナ制度と二重映像となったのも容易にうなづけるものである。先きに述べたペトラシェフスキーもハヌィコフもオブシチナに着眼し、『兵士の対談』(1849)を書いて専制を痛烈にやじった H. П. グリゴリエフもオブシチナ、農民アルテリこそロシアの英智の工夫であり、とっくの昔にロシアは社会主義を確立していたとまで極言してはばからなかったほどである。1848年の西欧諸国における一連の革命の敗北と反動によってペンシズムにとらわれたゲルツェン

が数年前に逃げだした祖国ロシアに思いを馳せ、ロシアにこそ社会主義が可能であると空想した際にも、その可能性の現実的根拠をロシアの農村共同体オプシチナに求めたのである。彼は『ロシアにおける革命思想の発達について』(1851)と『ロシア民族と社会主義』(1851)の中で、農村共同体をこうみるのである、——土地所有は個人的所有でなく共同体的共産主義的所有であり、共同体の成員には西欧流の所有権思想も法律的観念も欠如していて私有財産制が皆無である。農村共同体は一種の法人で地主も国家も警察も介入できない長老を管理者とする自治体制をとり、納税者はすべて共同の集会ベーチエにおいて同じ発言力をもち、いつでも長老のリコールが可能であり、個人の独立の権利は共同体全員の同意を経ずして犯されることなく、また公平な裁判なしに権利は剥奪されなかった。共同体の外には地主とツァーリの二重の専制の暴力が支配しているが、内では成員は相互に自己の権利を認め合い欺き合ったりすることなく無制限の信頼が支配し、各成員は相互扶助の間柄にあり徳性は深く人民的である。アルテリ制度も一定期間にかぎって数百人の労働者から成り、稼ぎ高は各人の仕事と協約によって分け合うものであった。ゲルツェンはこの農村共同体が傷つかずに残存したことは、とりも直さずロシアが西欧文明の外にとり残されたことを意味したとし、ロシアにとってまことに幸福なことだとしている。何故なら、ゲルツェンはこの制度こそロシア人を蒙古や野蛮から、皇帝の文明からロシアを救ったばかりでなく、西欧風に染った地主経済や中央集権的権力を防衛したからであり、尚重要なことは農村プロレタリアートの発生を不可能にしているからである。また、ゲルツェンはフーリエがフリーメソンを評価したようにロシアのフリーメソンと分離派教徒の共同体生活を高く評価した。このように40～50年代の思惟するロシアのインテリゲンチヤはスラヴ主義者を含めておおかた皆オプシチナ制度に着目し、そこにロシアの国民性を求めたり、〈ロシア型〉の社会主義を求めたりしたのであるが、特にロシア農民社会主義の構想はフーリエ思想に影響されること大きかった。これはフーリエ思想の農業的性格によるものである。

ところで、フーリエのファランステールの構想がチェルヌィシエフスキーの脳裡に深く極印されたのであるが、果してフーリエの情念論は狂気思想として退けられたのであろうか。これは追って論及するようにチェルヌィシエフスキーの歴史哲学の功利的性格に大きくかかわり合う大きな問題である。学生チェルヌィシエフスキーがこの点をどう受けとめたかについて若干触れなければならない。フーリエの『四運動』はその狂気と奇矯さの故に自国フランスで当時問題視されえなかった一因は、それが社会主義を大衆運動とする政治理論でなかったという点にある。1848年の社会主義者や共産主義は政論家であり政治家であってフーリエやフーリエ主義者の如きファランステールを実験的に試みる夢想家ではなかった。当然のこと1848年の激動の世界においてフーリエの思想は何らの現実的力をもち得るはずがなかった。しかし、ツァーリが全能の専制君主として暴圧のピラミットたる国家を統治していたロシア、兵營とペトロパヴロスク監獄とシベリヤ流刑を政治の基礎として絶対的専横を極めていたロシア、三千万の農奴を土地に緊縛し近代的自我の欠けたアパシーのロシア、このロシアにとってはフーリエのファランステールの夢想はこの上ない危険思想であつたばかりでなく、その情念の哲学は見事な自由思想としても映っていたのである。フーリエの情念論が18世紀フランス感覺論的唯物論に起源をもつことは論を待つまでもない。ロシアの上流社会とフランス啓蒙主義者とのつながりは深く、既にエカテリーナ女帝はディドロを招いたりして啓蒙女帝ぶりを發揮しているが、ゲルツェンによれば、ヴォルテールやディドロの哲学は宮廷貴族の趣味に合い古い偏見からの人間の解放というよりも、むしろ農奴にたいする主人の立場を正当化する武器に仕立てて享樂本位に受け取られたのである。40年代のインテリゲンチヤや学生にとってはエルヴェシウスの『精神論』(1758)と『人間論』(1772)は誰も読む教養の書であり、彼の快樂や功利説は普遍的真理として受け入れられていた。フーリエの情念論も、無論、エルヴェシウスの感覺論的功利説と無縁ではなく、それに大きく由来するものである。学生チェルヌィシエフ

スキーは『精神論』を読んで、非常に多くの思想がある、これには持前の頭でたどりついたものだ、と記しているところからみても、功利的見地は既に共有財産となっていた。そしてこの系譜を引き継いだのが『道徳および立法の諸原理序説』(1789)の著者ベンサムである。ペトラシェフスキーの共同文庫にエルヴェシウスの著作とベンサムの全集があったことは興味深い。後にチェルヌィシェフスキーがベンサムの著作を丹念に読んで書評を書いていることは、既に学生時代にフーリエやエルヴェシウスを通じてフランスの感覚論に相当詳しく、ベンサムをこの系譜に与すものと理解していたとしても大過あるまい。ツァーリ、貴族、地主、農民、農奴、これらどの人間にも共通項ともなる幸福の追求、快樂の追求という人間的自然の欲求・要求の人間学的原理は、たしかに先進諸国にあっては既に過去のものになっていたとは言え、ルネサンスも体験せず近代的ブルジョアジーも誕生していなかったロシアにあっては、抑圧された農奴農民の人間的復興の斬新な哲学原理となり得ることは十二分にありえたはずである。ペトラシェフスキーがフーリエの情念の解放、魅力ある労働、自然的教育に注目して、これの実現には人間の不幸の原因である封建的土地所有と専制的政治の廃棄が必須であるとしたのも、快樂と幸福の追求が人間的自然の法に適っていると見做したがためである。フランスの感覚論的唯物論のいくつかのテーゼは、40年代の先進的思想家にとっては、専制・農奴制を道徳的に批判するよすがとなっている。

チェルヌィシェフスキーはフォィエルバッハの『キリスト教の本質』を読んで、キリスト教的博愛的宗教観を払拭すると同時に、私的「自我」と絶対的実体との合流ないしは同一性の意識を高めてフィヒテの絶対的実体としての大宇宙たる「大我」にではなく、人間個々人の小宇宙たる「小我」に視点を移し、それとフォィエルバッハの理性的自我とを緋い合わせて、「自愛 **самолюбие**」という観念を自らつくりだしている。この観念は『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』(1856)の中に明確に表現されている、——自愛を非難することは当たっていない、これは非常に多くの良きものを産みだしている、

しかし悟性と愛の影響下において高尚な目的を己れに選定する時、その時にのみ限られる。そうでなければ自愛はあらゆる情念のように人間を偽りの道に導くであろう、そして人間は自らの力を他人のために無駄使いすることになるし、自分自身の榮譽にとっても活きないであろう、と。このように理性（悟性）に裏打ちされたエゴイズムは、自己の利益を追求して他を顧みない私利私欲<sup>エゴイズム</sup>では決してなく、むしろ自己を他者との関係のなかで（共同体のなかで）理性的に設定した上で自己を愛するという自己愛と解し、この自愛<sup>エゴ</sup>を彼は世界のデミウルゴスにまで仕立て上げるのである。後に彼はこの自愛を『哲学の人間学的原理』（1860）の中でベンサムの功利論と噛み合せて功利論的性格をつよくおしだした人間学を、いわゆる革命的情勢期（1859～61）に展開することになるが、早くも学生時代にこの作業の準備が既に進められていたと見ることが十分にできる。その際フォイエルバッハの人間学的唯物論自体が、感覚的存在を至上の存在とみる点で18世紀感覚論哲学の系譜につながるものであることを考え合せなければならない。エルヴェシウスの功利論は近代の主権在民の思想ともなっていた、——エルヴェシウスによれば権力欲はある国の政体のきめ手であるが、もしその至上権を一人におけばその権力欲は専横となり、最大多数の幸福の原理に反し、専制国を産みだす。しかし至上権が市民のすべての個人に平等に配分されるなら、国民全体の利益と快樂の追求を可能たらしめる、したがって、自由国とは人民主権の政体でなければならない。チェルヌィシエフスキーは一時ギゾーの理性主権の見地につられて、人民主権と絶対君主権との間を動揺して、その後人民主権説(souveraineté du peuple)に強く固まるが、これには色々な現実的事件が強く影響しているにしろ18世紀フランス哲学の功利論も強く作用していたとしなければなるまい。手短かに言えば、学生チェルヌィシエフスキーはエルヴェシウス、フーリエに流れる感覚論とフォイエルバッハのエゴイズム論とを結びつけて彼なりに近代的自我<sup>エゴ</sup>の原理を確立し、それを人民主権の原理たらしめていたと言えるのである。

ヘーゲルの歴史哲学は絶対理念（神）の自己展開，神的意識の自己展開の形態をとり，尚かつその運動が完結してしまっていたために未来は欠如していた，現実的なものは理性的なものとして積極的なもので、その否定を更に必要としていなかった。これに対してフーリエの社会哲学には否定の思想が貫流していた。それは現存体制の批判を通して未来社会像を呈示していたのである。ロシアの悲惨な現実を直視していたペトラシェフスキー会員にとってはヘーゲルの哲学はあまりにも高尚すぎたであろう，理解のゆかなかったものでであろう，現にこの哲学は何らの影響力ももたなかったのである。それに対してフーリエの社会哲学は否応なくロシアの目覚めたインテリゲンチヤの意識を捉えて離さなかったのである。

ニコライ I 世 (1825~55) は青年将校が陰謀した1825年のデカプリストの叛乱に迎えられて即位しクリミア戦争敗色のうちに世を去るが，この間に二つの西欧の革命——7月革命と2月革命——の雷鳴に震撼し，「血まみれのニコライ」時代をつくった。彼の治世は農奴制度の破綻による専横な官僚的政治の末期症状をあからさまに呈し「疫病の時代」と形容された，内においては，新に対しては旧を，進歩に対しては反動を，自由思想に対しては検閲テロを，陰謀に対しては列間答刑を，秘密結社に対しては第三課を，西欧思想崇拜に対しては「ギリシア正教・専制主義・スラヴ国民性」の官許イデオロギーの強制を，危険人物に対してはシベリア流刑をもってし，外に対しては「ヨーロッパの憲兵」の役目を演じた，——1840年ポーランドに兵力を動員してそれを支配下におき，オーストリアの革命鎮圧者ヴィンディッシュ＝グレーツに勲章をさづけてハンガリーの叛乱を鎮定した。彼の治世は弾圧に始まり，弾圧に弾圧を重ねて，そして弾圧で終わった，——『哲学書簡』(1836)の著者チャーダーエフは農奴制廃止を唱えて狂人と診断された，サルトゥイコフ・シCHEDリンは『矛盾』(1847)と『縫れた事件』(1848)でロシアのかかえている社会的矛盾を書きすぎて流刑処分をうけた，ベリンスキーは『ドミトリー・カーニン』(1830)で農奴制に抗議したため能力不足の故にモスク

ワ大学から放校処分を受けた、ゲルツェンはサン＝シモン思想普及のかどで大学から追われ、間もなくロシアを脱出した、バクーニンもいたたまれずドイツの青年ヘーゲル派の中に飛びこんだ、グラノフスキーもスタンケヴィッチもドイツで学ばざるを得なかった。ペリンスキーの夭折(1848年春)、ゲルツェンの亡命(1847年)の後、ペテルブルグにもモスクワにもこれと言った体制を批判する危険人物は存在しなかったはずだ、だがしかし1848年の2月革命後の一連の西欧の革命的余震が反動の牙城たるロシアの隣国にまで波及するにつれ、支配体制側は余計に恐怖に襲われ、足下にもしや不穏な動きがありはしないかと戦々恐々の様を呈し、全然革命運動の秘密結社でもなければ思想的統一すらなかったサークル、ドストエフスキーの言葉を借りれば、政治的社會主義もないただたんなる「理論的社會主義の思想に染った」思想研究サークルを、スパイを用いて「陰謀の一味」として1849年4月22日夜半にかけて潰滅する挙に出たのである。世に言うペトラシェフスキー事件である。これこそ断末魔にとりつかれたニコライ I 世の打った最後のあがきの手、否すでに政治的思想的弾圧を通り越して、茶番劇としてしか言いようのない見えすいた手であった。

茶番劇にしろこの事件が青年チェルヌィシェフスキーの身边で起ったことは、事件の重大さの故に彼に鮮烈な印象を与えずにはおこななかった。それもそのはず、彼と親交のあったハヌィコフ、デブー、フィリップフがこの事件に連座していたからである。事件発生2日後に秘密警察によるペトラシェフスキー、ハヌィコフ、デブー兄弟、プレシチェフ、ドストエフスキーらの逮捕をきかされ、——恐ろしいほど卑劣で、馬鹿げた事件だ、と日記に表白し、逮捕に関与した当局についてこう義憤をぶちまけ怪気焰を吐いている、——ブトゥリン〔「出版にかんする秘密委員会」の会長〕、憲兵司令官オルロフ〔1825年デカプリスト叛乱の鎮圧者〕、ドゥベリト〔特高警察「第三課」班長、憲兵隊長〕の豚ども、畜生ども、皆吊し首になるのが当たり前だノもしおれが歴史に登場して、おれの番にでもなったら、奴等の社会に嘴を入れてやる

からいまに見ておれ、と。この事件によって彼は、ツァーリが決して慈悲をたれる君主でないことを身をもって感じたことであろう。一瞬にして彼の懐いていた階級協調主義と博愛観に基づく無制限君主制の政治観は吹き飛んだことであろう。支配権力は仮借も容赦もなく無実のサークルを抹消し、あまつさえ同志や親友を奪ったからである。チェルヌィシエフスキーが最も気づかったのは、言うまでもなく、かのハヌィコフであった。ニコライ I 世は 8 ヶ月間逮捕者を監獄の中にぶちこんでおいて 1849 年 12 月 22 日に 21 名のペトラシエフスキー会員に銃殺刑をあらかじめ判決しておいてセミョーノフスキー練兵場で恩赦するというかの有名な「死の予行演習」の茶番劇を演じた。チェルヌィシエフスキーと親交のあった先のハヌィコフはオレンブルグ常備隊の兵卒に、デブー兄弟とフィリッポフは囚人部隊に、ダニレフスキーは辺地に、入隊もしくは流刑に処された。

チェルヌィシエフスキーが無制限君主制の階級協調主義的博愛的政治観を自己批判に付したのは、この「死の予行演習」の茶番劇の三週間後に当たっていることは銘記しておかなければならない。絶対主義は貴族制の対照物であるどころか、農奴制＝官僚専制というピラミット円錐体の完成物であって、その頂点たるツァーリを排除しても、問題は旧態依然たるもので何も改まるものでない、という 1 年半ほどの前の自己の博愛的政治観の批判にすぐつづいて、彼はロシア観についてこう綴っている、——近々の革命にたいするどうしようもない期待、革命への渴望。理想化によって幻惑されていない人、未来を過去から判断できる人、……この人は革命を畏怖することはできない。この人は人々に別のことを断じて期待したりなどしない、物事の平和的な物静かな発展は不可能であるとわきまえている。おれの痙攣と一緒にあればよいのだ、おれは痙攣なしでは歴史は一步も前進しないことを知っている。しかり、血も人間の中で痙攣して流れるではないか。心臓の鼓動は痙攣ではあるまいか。果して人間はよろめかずして歩けるか、否、一步ごとに傾く、よろめく。人間の道はこのよろめきの連鎖だ。人類が真直ぐに平坦に歩けると

でも考えることは愚の骨頂だ、こんなことはいままで一度もなかったことだ。歴史はジグザクに進むのだ、と。チュルヌィシエフスキーは更に付け加えて、この革命観の立場は社会主義者=民主主義者の党派のそれであり、その目的は下層階級に多くの富をもたらし、人類を今よりもっと前進させて貧困を根絶することである、そしてその手段は流血、戦争、一揆、テロリズムであると日記の中で豪語している。しかしこの言葉は決して彼の虚勢でも大言壮語でもない、用いる手段こそ違え、彼の後の活動はこの言葉によって九分通り規定されているからである。ここに革命に徹する雄々しい革命家チュルヌィシエフスキーの彷彿たる未来の姿の原像を端的にみてとることができる。

彼はこの自己批判にもとづくロシア観、闘争的歴史観を表白した三ヶ月後の1849年5月15日にもっと具体的な政治的手段と方策を頭に描いて、明日にでも実行に移すが如き意気ごみで秘密結社と秘密出版の構想を懐いた、——農民解放と兵役義務解除と租税半減を謳った<sup>アエフエス</sup>宣言書を印刷すること、これをすすべて主教管区監督局やペテルブルグ遠方の県知事に、宗務院名にて小包で極秘裡に発送して暴動や叛乱を起すこと、そうすれば人民は皇帝を殺害し激烈な暴動を惹き起す。鎮圧されてたり惨敗に終わっても人民が動揺し自己の状態に我慢できなくなり暴動に広い支持を与えるようになる。自分にはこの秘密出版と檄の作成の決断力と能力を持合せている、自ら破滅しても悲歎に出来ない。敵の将軍との関係からすれば、自分は明日の戦闘にでも戦わなければならない将軍である。内心、最も冒険的に、最も勇敢に、最も向う見ずに行動できる、と。宗務院名で檄を散くという彼の幼稚な手段はさて置き、ここで指摘しなければならない点は、彼の秘密結社と秘密出版の発想がペトラシエフスキー会の過激グループのそれと無関係ではないということである。ペトラシエフスキーが主催した金曜会は読書と討論の会であってこれと言った秘密結社というほどのものではなかったが、この会とは別にスペシネフ、モンベルリ、グリゴーリエフ、ミリューチン、マイコフ、モルドヴ

イーノフ、ドストエフスキー、フィリップフらは、ペトラシエフスキー事件直前に、ロシアを変革するための〈秘密結社〉をつくり、そこに秘密印刷所を設けて宣言書、檄の印刷を計画していた。現に印刷機が持ちこまれたという同時代人の回想もある。このメンバーのうちチェルヌィシエフスキーがフィリップフと知己であった事実は見逃がすことはできない。デカプリスト以来の秘密結社とバプーフやブランキ流の結社陰謀はロシアの革命運動の基調であり、とりわけ60～70年代のナロードニキ運動の中核ともなるが、ペトラシエフスキー会の過激グループがデカプリストの方策手段を引き継いでいたことには異論なく、チェルヌィシエフスキーも学生時代この方向でロシアの変革を思い描いていたことは否めない。農奴解放の革命的情勢期(1859～61)に組織された『土地と自由』(1861)、檄『遠方からの手紙』(1860、チェルヌィシエフスキーの筆になるとみられるもの)、檄『地主農民への同情者からの挨拶』(1861、無署名だが彼の筆になるものであることほぼ確実)、『宛名なき手紙』(1862)、彼の同志 H. B. シェルゲーノフの檄『兵士諸君へノ』(1861)は、この構想の一応の実現とみて差支えない。革命的情勢期にチェルヌィシエフスキーのグループがモスクワに秘密出版所をもっていたことは、同時代人の回想などによって明らかにされている。こうみると、青年チェルヌィシエフスキーのペトラシエフスキー会員の数人との直接接触が当時の必読書であるフーリエの『普遍的統一の理論』、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』、ヘーゲルの『法哲学』等の入手やこの会の発想であるオプシチナ論の受容だけにつきるものでなく、さらに秘密結社や秘密出版の政治的方策の引き継ぎをも意味していたと言わなければならないのである。

もし、作家ドストエフスキーが『作家の日記』(1873)で次の様に書いていることが、ペトラシエフスキー会を支配していた思想的雰囲気（霧）の正鵠を射った表現であるとするならば、これはチェルヌィシエフスキーが自己批判に付したかの階級協調主義的博愛主義的政治観ないしは〈社会主義〉観と同水準のものと言えるであろう。ドストエフスキーは回想して言う、——実際、当

時生まれかかっていた社会主義は、その幾人かの指導者によってすらキリスト教と同一視されて、単に時代と文明とにふさわしくキリスト教を修正し改良したものにすぎないと考えられていた。そうした当時の新しい思想のすべてが、われわれペテルブルグ人間にはおそろしく気に入ってしまった。それはこの上なく神聖かつ道徳的であり、しかもさらに重要なことには、全人類的なものと思われたのである。……現代社会の基盤自体が不道徳的である、宗教や家族が不道徳である、私有財産権が不道徳である、という信念、四海同胞の名において諸国家間の相違を廃し、普遍的な進歩を妨げるものとして祖国を軽蔑する思想等々——これらはすべてわれわれが抗することのできない影響力をもっており、そこに含まれていた一種の寛大さ故に、われわれの心情と精神を捉えたのである、と。チェルヌィシェフスキーが1年半ほど前の無制限君主制の自己の政治観を自己批判した後に、次のように闘志満々と日記のなかで述べる時、これはもはやドストエフスキーが表現したようなペトラシェフスキー会の思想的雰囲気とは雲泥の差をもつものである。彼は革命的熱血漢として、むしろ大胆不敵の闘士として自己の政治的信条を表白する、——今、自分の掌中に権力を握っているなら、ただちに農民の解放を宣言し、軍隊の半ば以上を解隊するだろう、いますぐにではないにしろ、近々のうちに、できる限り行政権と、一般に政府の権力を制限し、反動的教育・学問・学校の権限を制限するだろう、婦人に参政権を与えずにはいられない。……人類を前進させるには流血、戦争、一揆、テロリズムである、と。ここにはキリスト教的博愛観は微塵もみられない。ペトラシェフスキー事件後、彼はギリシア正教を含めた宗教的見地に対しては極めて否定的な態度を示すようになり、精神的桎梏や先入観念からの解放よりも物質的欠乏や貧困からの解放を第一義的の先決問題としている。彼によれば、イエス・キリストは道徳や人類愛を説きはしたが、文盲、犯罪、私利、罪悪からの人間解放のための現実的手段を一度も歴史上提供したことがないのである。キリスト教は原罪からの精神的解放を誣いこそすれ、一度も物質的な、地上的な要求・欲求

を満足させる手段を講じたことがなく、物質的労働を重んじたこともないのである。チェルヌィシェフスキーがここでピエール・ルルーやビッシェ流のキリスト教的共産主義を超克したことは明らかである、しかし、ペトラシェフスキー事件やフランスの政治的事件だけで、チェルヌィシェフスキーの従前のキリスト教的人格神の見地やキリスト教的博愛観を一挙に払拭したのだとすれば、それはあまりにも安易な論法であろう。この払拭にどんな力が働いたのだろうか、もっと正確に言えばどんな理論的力が作用したのだろうか、この点の解明によってチェルヌィシェフスキーの座標定位と初速度形成の全貌はほぼ伝え得るのである。この解明を急ごう。

学生時代のチェルヌィシェフスキーの外国の崇拜者、ルイ＝ブラン、プルドン、フォイエルバッハ、レッシングの四名の中二人がフランスの社会主義者であり残り二人がドイツ人であったということは、彼の世界観形成にとって附帯的現象ではなく、きわめて本質的特徴となっていた。更にドイツ哲学者のなかからフォイエルバッハを崇拜者に選んでいることは西欧哲学の潮流と時代的要求が反映されている。フランス社会主義とドイツ哲学の融合はドイツ青年ヘーゲル左派の特許権でなかったことが、ロシアの40～50年代初頭の思想動向を回想しているゲルツェンやチェルヌィシェフスキーの諸論文のなかではっきりと読みとれる。時代的には適及的考察になるが両人の特徴づけをきこう。ゲルツェンは『ロシアにおける革命思想の発達について』(1851)のなかでこう言及している、——モスクワでは〔フランス〕社会主義がヘーゲル哲学と肩を並べて歩いた。当代の〔ドイツ〕哲学と〔フランス〕社会主義との連繋は理解し難いものではない。にも拘らず、ドイツ人達は最近になってやっと学問と革命と連繋を認めた……ドイツ人達は学問において極めてラジカルであるが、行動において保守主義であった。紙上では詩人で、生活のなかでは素町人であった。われわれロシア人はこれとは逆に二元論を好まぬ。われわれにとっては社会主義は哲学の最も自然な三段論法であり、国家

への論理学の適用とみてとった、と。ゲルツェンのこの見解そのものがドイツの青年ヘーゲル左派にどれほど影響されたものであるかは不問に付すとして、それにしてもドイツ哲学とフランス社会主義との融合ないし連繋が、当事国のドイツやフランスにおいてだけでなくロシアにおいても一般的であったという指摘が興味を呼ぶ。勿論、彼自身と友人のオガリョフをそれらの連繋者と自認していることは疑いを挟む余地がない。チュルヌィシエフスキー自身も『ロシア文学のゴゴリ時代概要』(1856)の第5論文でこう指摘している、——ドイツ哲学が扱ったのは、専ら最も一般的なかつ抽象的な学問的諸問題のみだった。世界をいかにみるかの一般的体系の若干の原理は、ドイツ哲学によって発見された上、道徳的諸問題や一部は歴史的諸問題の説明に適用された。その代り他の少なからず重要な個別科学はドイツではとりわけ注意を惹かずにとどまった、とくにこのことを人間生活の物質的側面に起因する実践的諸問題について言っておかなければならない。これらの問題対象は、ドイツの思想家よりも常にフランスの思想家の心を領していたのであるが、長い長い間これらの問題対象は事の内奥にまで至らずに、上面の、幻想的な手口で解決されていた。ところが、とうとうドイツ哲学の諸成果がフランスに浸透し、反面、フランス人によって集められた諸々の観察がドイツに浸透した時、実証的な、精密な諸解決の時代が始ったのである。その時になって初めて学問の一面性が解消した、つまり、学問の内容はそのすべての本質的課題に関しては説明のつくものとなったのである。人間生活の物質的および精神的諸条件と社会生活様式を規制する経済的諸法則とは、これらが人間の本性の諸要求に照応すべき目的でもって、また一步一步の途上で見出される生活上の諸矛盾からの出口を発見すべき目的でもって、研究されるようになったのである、そして生活の最も重要な諸問題の十分な精密な解決が見出されるようになったのである。この新しい要素がまた我国ロシアの知的発展のなかにも入って来た、つまり評論活動はこれを利用し、そしてこの評論の基本的見地は多くの場合、大きな規定性と生活性〔жизненность 生活

の視点]を得たのである、と。ロシアでこの評論の活動を行なった最初の人  
が、ベリンスキーであり、その事業の継続をチェルヌィシエフスキー自身  
が行なったのである。

このように青年ヘーゲル左派のチェシコフスキ、モーゼス・ヘス、青年  
マルクスのしたドイツ哲学とフランス社会主義の結合・融合は、形態の違い  
こそあれロシアにおいてもベリンスキー、ゲルツェン、チェルヌィシエフス  
キーによって遂行されたのである。ことチェルヌィシエフスキーに関しては  
この結合・融合のプロトタイプを学生時代の日記のなかに見てとることがで  
きる。フランスからルイ＝ブランとブルードンなる政論家と生起していた激  
動の政治過程とフーリエとを通じて社会主義を得たとするなら、青年チェル  
ヌィシエフスキーがドイツから得たものは、ヘーゲルの弁証法とフォイエル  
バッハの人間学的唯物論の哲学であり、そして社会主義と哲学は彼なりの仕  
方で学生時代においてすでに見事に結合し、融合しているのである。そして  
この結合・融合の彼の作業は彼独自のものと言っても差支えない、というの  
は後に詳述することにもなるが、次の事情があるからである。ロシアへのド  
イツ哲学の流入・摂取の点からみれば、20～30年代にシェリング哲学が、30  
～40年代にスタンケヴィッチ会にヘーゲル哲学が風靡した、ベリンスキーも  
バクーニンもグラノフスキーもゲルツェンも一時ヘーゲリアンになった、  
つづいて『キリスト教の本質』(1841)はロシアの観念論哲学の唯物論哲学へ  
の転轍機の役を果し、ベリンスキーの『ゴゴリ宛書簡』(1847)やゲルツェ  
ンの『科学におけるディレタンチズム』(1843)や『自然研究書簡』(1845～46)  
の記念碑的論著を産み、ロシア唯物論哲学の足固めとなった。しかしペトラ  
シェフスキー会は概してフーリエ教理に染まり、ドイツ古典哲学を本格的に  
研究する会ではなく、むしろフランス感覚論哲学の色彩を濃くしていたもの  
である。それとてフーリエの情念論のもつ哲学(感覚論的唯物論)を自然法  
で裏付けるだけで哲学的にはそれを一歩も出ていない。この点ではペトラシ  
ェフスキー会はロシアの哲学研究の正当な継承者ではなかった。またチェル

ヌィシェフスキーが先きのゲルツェンの論著を読んでいたにしろそこには唯物論は底流として流れてはいるものの、いまだ哲学と社会主義の結合・連繫を示しているものでなかった。更に学生時代のチュルヌィシェフスキーは、ゲルツェンやオガリョフがすでに外国にあった上、彼らとは一面識もなかったから直接の影響を受けてはいない。こういうわけで学生チュルヌィシェフスキーのドイツ哲学とフランス社会主義との結合・融合の作業は独自のものである、しかし、勿論この結合・融合の素地はスタンケヴィッチ会のベリンスキーとゲルツェン、ペトラシェフスキー会のハヌィコフらによって既に出て来ており、融合を待たばかりの状況にあったと言っても大過とはなるまい。ではどのようにしてドイツ哲学はチュルヌィシェフスキーの思想構造の大黒柱として組み立てられて行って、かの1850年2月20日の自己批判につながるのだろうか、かのキリスト教的博愛観の一扫にドイツ哲学はどんな理論的力として作用したのであるだろうか、——この懸案の問題の解明をこの視点から言及しよう。その際ドイツ哲学のロシアへの移植の歴史の検討も併せて論及しておくことがこの解明を浮きたたせるに好都合である、それにはチュルヌィシェフスキーが7年後に書き上げた秀れた論文『ロシア文学のゴゴリ時代概要』(1855)を参酌して彼の学生時代に遡及する必要も出てくる。

チュルヌィシェフスキーは1846年秋にペテルブルグ帝大の歴史哲学科に入学したが、歴史哲学科なるものは名ばかりで哲学の講義は何一つまともに聴講していない、それもそのはずニコライ I 世は大学を自由思想、批判思想の根城とみなし、それ故哲学は百害あって一利のない無用の長物として廃講の浮目を見ていたのである。ゲルツェンの『過去と思索』によれば、モスクワ大学では1826年以来哲学の講座は閉鎖されていて、シェリング主義者 M. Г. バヴロフ (1793~1840) はモスクワ帝大で物理学や農業経済のかわりに哲学をこっそりと講じ学生達をひきとめていたと言われる。ペテルブルグ帝大のチュルヌィシェフスキーも、同じ条件の中であって、まともな哲学らしい講義を何一つ受講していない。彼の学生時代の書簡から見ると、彼が学んだもの

は、ラテン語、ギリシア語、近代語、経験心理学、ロシア文学、古代ローマ史、普遍史（世界史）、神学などで、特定の教授から哲学を詳しく教えられたという形跡がない。このことは後に触れるように彼の卒業論文のテーマが「フォンヴィーゼンの『旅団長』（1769）について」という歴史哲学には縁も由かりもない苦しまぎれのテーマを彼に選ばせる結果をもたらした。しかし、表向きは哲学に無縁なテーマを卒業論文に選ばざるを得なかったが、下宿ではドイツ哲学の勉強にいそしんだ。当時のロシアには、ヘーゲル形而上学体系の解体過程の途上で出現したヘーゲル右派から左派までの注目すべき論著はすべて流入していた。チェルヌィシエフスキーがヘーゲル中央派のミヘレット Michelet の “Geschichte der System der Philosophie in Deutschland” (1837~39) を手にしてドイツの哲学通史に接するのも決して偶然ではなかった。この論著に接したのはフーリエの『普遍的統一の理論』の読後だが、『法哲学』と『キリスト教の本質』を原書で読む前であった。このことはチェルヌィシエフスキーにヘーゲル哲学の理解を容易ならしめ、さらにフォイエルバッハによるヘーゲルの客観的観念論の論駁の正当性を理解せしめるに有効であったと考えられる。このミヘレットの論著でチェルヌィシエフスキーはヘーゲルの一般的発展理論・普遍的進歩をギゾーの文明史における原理と事実とにマッチする時代の同じ志向として受けとめ、その歴史の発展理論に魅了された。彼の最初の印象ではこうみえた、——人間は発展を追えば追うほど、人間の思想や注意は一般的なものに向う、不変〔普遍〕の利害に、不変〔普遍〕の思想に向う、理念に向う。人間の思想〔思惟〕は益々より完全な、より深奥な理念に貫ぬかれ、理念の自覚に至りつく、ここにおいて部分的なもの、個別的なものは視界から遠のき、すべての価値は理念とのかかわりのなかで見られる。万有は理念から出発し、理念はそれ自体自ら発展し、万有をうみだし、個別から自分自身に立ち戻ってくる、と。彼はヘーゲルの絶対理念の自己展開、——個からそれを内含した普遍へ、具体からそれを内含した抽象へ、無自覚から自覚せる理念への自己展開——を人間歴史の普遍

的の法則ないしは發展理論として、一口で後の彼の言葉で言えば、「天才的な弁証法」「思惟の弁証法的方法」として高く評価したと断じてもほぼ間違いあるまい。しかし、彼がヘーゲル哲学の客観的観念論、思弁的体系、理念的体系、これまた後の彼の言葉で言えば、「諸原理」に長いこと賛成していたとは思われない。このことは間もなく親友ハヌィコフから『法哲学』(1821)を借し与えられて読んだ読後評によってはっきりとみてとることができる。チェルヌィシェフスキーはこの書物は言葉も思想も晦渋で難解であると正直に認めながらも、「契約」の章まで読んで、独創性にとほしく、思想は大部分鋭さを欠き中庸で斬新さに息づいていない、と評し、つづいて補遺 *Zusätze* の例に助けられながら「道徳」の章に至りついて、ヘーゲルの『法哲学』の保守性を次のように看破した、——細部にわたって、ヘーゲルは現状事物の、現在の社会制度の奴隷であるようだ、というも死刑など拒否していないからだし、彼のもろもろの結論はおじているかしているのだ。それとも實際一般的原理が現存するもの——まさにフィヒテが偶像視した現実秩序——の替りに、どのようにあるべきかをうまく説明してくれないからだ。しかし、若干、まあほんのちょっぴりだけ論理的力を認めてもよい。肝心なことは彼の人格、つまりヘーゲル自身、この哲学を自覚していないのだ、——嵐の如き改造から遠ざかっている。完成すべきものについての空想的思考から遠ざかっている。*die zarte Schonung des Bestehenden* (現存のおだやかな護持)だ、と。ルイ＝ブラン、プルードンの社会主義に情動的に共鳴し、フリーエの未来社会像を知っていた青年チェルヌィシェフスキーは、ヘーゲルの『法哲学』に未来へのウトピー、あるべき世界 *Sollen* の欠如を看破し、「理性的であるものは現実的であり、現実的であるものは理性的である」のヘーゲルのテーゼが、まさしく現存する社会秩序の哲学的肯定であることを見破った。恐らくこの当時の頃を回想しているものと考えられるが、年老いて死を間近かにした晩年のチェルヌィシェフスキーは『芸術と現実との美学的関係』の第三版序文(1888)であらましこう述べている、——原書でヘーゲ

ルを読むまえに郷里サラトフでロシア語で不完全に叙述されていたヘーゲル哲学を知っていたが、実際に原書に当ってヘーゲル哲学を読んでみると期待したほどではなく、まるで17世紀のスコラ哲学者が書いた如き観を呈し、つまらなく自分の学問的教養としては七面倒臭くて無益であった。何故つまらなかったかの原因を探してみれば、それはロシアの当時の思想家がヘーゲル左派の精神でヘーゲルの哲学を叙述していたがためである、と。チェルヌィシェフスキーが『法哲学』を批判する際、まだ『キリスト教の本質』を手にしていないところから察するに、この『法哲学』批判に資して力あったのは、すでに『祖国の記録』誌上に発表されていたゲルツェンの論著『科学におけるディレタンチズム』と『自然研究書簡』、ベリンスキーの『ロシア文学観』(1844~47)とみて間違いない。およそミヘレットと『法哲学』のヘーゲルの理念の哲学は30~40年代のロシアのスタンケヴィッチ会に支配するものの、その後、『キリスト教の本質』の出現と相俟って、ゲルツェンやベリンスキーによって大かた克服され、チェルヌィシェフスキーの学生時代ではヘーゲル左派の精神がロシアに定着し趨勢を占めていた。それ故彼自身難なくヘーゲル哲学の保守性と現存社会秩序とのその癒着を批難することができたとしなければならない。しかし強調しておきたいが、ヘーゲル哲学の一切合財がガラクタの様に彼によって放擲されたのでは決してなく、「天才的な弁証法」は彼の芸術哲学、歴史哲学、人間学のなかに色いろな意味で活かされているのである。

『キリスト教の本質』は哲学や進歩的思想を探るロシアの青年にとって必読の書であり、バイブルにも匹敵した思想力をもっていた、その上この書の感化を受けずに革命的民主主義者に成ったロシアの思想家は誰一人いない、勿論、ベリンスキーもゲルツェンもオガリョフも読み、ペトラシェフスキー会員スペシネフもフォイエルバッハの人間学を「現代の偉大な特徴的事実、現代の教理」に数え入れていた。したがって親友ハヌィコフがチェルヌィシェフスキーに『法哲学』の次ぎに間髪を入れずに『キリスト教の本質』を貸

し与えたことは、何か偶然でなく当然の成行であったのである。ドイツ哲学を求めて止まなかった学生チェルヌィシェフスキーにフーリエにまさる衝撃を与えたことは、この書を手にした約半年後の日記の章句のなかにはっきりと読みとれる。彼は表白する、——宗教の問題で悩んでいた懐疑主義は、自分が全身全霊フォイエルバッハの学説に委ねるまでは、自分の心のなかにつのっていた、と。まず第一にこの唯物論の書が彼の従来の宗教観を一掃する役を果たした、この書を手にした読後感もこのことを語っている、——従来の信仰は全く通用しない。神は人格神であり、教会による啓示の解釈は全く不用となる。宗教はキリスト教の神性や神の人格性の確信に変わる。そして人間というものは常に神を人間的に想像し、自分の諸概念に合わせて想像して、良き絶対的人間として神を想像するのだ、と。彼がフォイエルバッハのアントロポロジー（神人同型説）を受け入れてはいるが、宗教疎外論を理解することが出来なかったことは、「ロゴスと神の似姿との秘密」や「摂理および無からの創造の秘密」以降の章には賛成しかねると述べている点やその後の彼の論著には疎外の概念が全然見出されない点から了解できる。ロシアのフォイエルバッハ崇拜者はフォイエルバッハを自然科学と哲学の融合者、現実的な生活概念の確立者、感性的人間の提唱者とみていて、現在われわれが疎外論で高く評価する宗教的疎外の主唱者とは全然みていない。しかし学生時代のチェルヌィシェフスキーにとってただ単にフォイエルバッハが彼の宗教観を一掃するだけにあづかって力があつたとするのは一面的であろう、むしろフォイエルバッハの人間学的唯物論の諸々の原理——例えば現実概念や理性的エゴイズム論等——が、彼の芸術哲学（美学）や歴史哲学の素地をもすでに創り出しているのである。『芸術と現実との美学的関係』第三版序文で述懐しているように、ロシアのフォイエルバッハ崇拜者の彼は、この唯物論的美学の学位請求論文をかくまでに、暗記するほど何度も何度も『キリスト教の本質』を読みかえしたのである。ロシアのフォイエルバッハ心酔者の彼がこの他に『哲学改革のための暫定的命題』（1842）と『将来の哲学の根本命

題』(1843)と『宗教の本質』(1845)を熟読した節々もみられる。ともあれ、学生チェルヌィシエフスキーが哲学の分野での崇拜者としてヘーゲル左派のフォイエルバッハを掲げたのである。文句なしに彼をしてそうなさしめたのには、既にロシアの思想家たちがロシアにフォイエルバッハの哲学を定着せしめて、ちょうどドイツの青年ヘーゲル左派がドイツ哲学とフランスの社会主義とを結合・融合せしめたように、ロシアの現実的生活の問題と結合せしめて、「生活のための哲学」、「生活の哲学」に改造し直していたことが作用していたのである。

ここでロシアへのドイツ哲学の移植の歴史とそれの進歩的思想家による克服のあらましを、とりわけ歴史哲学の視座から内挿して、学生チェルヌィシエフスキーの拠って立っていた哲学的地盤の説明に供しよう。ロシアへのドイツ古典哲学の流入過程はドイツ哲学の進展相とほぼ対応しており、19世紀20年代から50年代までをおおまかに言えば、20～30年代のシェリング哲学の『愛知者』会の創立、30～40年代のヘーゲル哲学のスタンケヴィッチ会による研究、そして40～50年代のフォイエルバッハの人間学的唯物論の定着である。ドイツ哲学を文芸評論活動に導入したロシアの30年代のジャーナリスト、H. И. ナデージュデン(1804～56)が『モルバ』誌(1832, №20)の中で語るところによれると、ヤコビ、フィヒテ、シェリング、カント、ヘーゲルの著作はロシアの神学院でかなり翻訳され、キエフ神学院ではミヘレットの哲学史が講義に用いられたりなどして、聖界のなかでもドイツ哲学はかなりの位置を占めている、また俗界では И. А. フェスレール、Д. М. ヴェランスキー、特に И. Я. クロネヴェルクとモスクワ大学の М. Г. パヴロフはシェリング哲学を講じて学生に多大の影響を遺した。シェリング哲学——ナデージュデン自身シェリングの同一性の哲学を哲学の最高の水準とみだてていた——がロシアの聖界と俗界の両界に精神的位置を占めたということは注目すべきことで、これはシェリング哲学自体がもつ前期と後期の二面性に大きくかかわっているものと判定できる。周知の如く、前期シェリングは自然哲学の性格を

もつが、後期シェリングは同一の哲学から啓示の哲学の色彩を濃くするものである。前者の性格が俗界のペテルブルグ内外両科院の教授ヴェランスキー(1774~1847)とパヴロフ(1793~1840)教授や M. A. マクシモヴィッチ(1804~73)をとらえた、ヴェランスキーはドイツで前期シェリングの講義を聴きシェリング心酔者となり、彼同様に全宇宙の現象を「普遍的有機的生命」の顕現とし、自然を自我の措定・反措定・総合のトリアード(フィヒテ哲学の継承)として容認し、無機的自然においては磁気、電気、化学の三過程が、有機体においては動植物の目的論的行動が、人間において意識的知、絶対理念、絶対知が発展相として展じられるとみなした。さらにまたシェリングの後継者である L. オーケン(1779~1851)の“Lehrbuch der Naturphilosophie”や“Lehrbuch der Naturgeschichte”の思想に共感をもった。パヴロフもシェリングとオーケンに大きく影響をうけ、万物の活動の源泉を神的本性の力であるとする活力説に求め、自然科学と哲学との統一の見地をつくりだし、この傾向は疑いもなくゲルツェンの『科学におけるディレタンチズム』と『自然研究書簡』に発展的に継承されて行く。しかし、ヴェランスキー、パヴロフ、マクシモヴィッチの自然哲学的傾向や A. И. ガリーチ(1783~1848)、И. И. ダヴィドフ(1794~1863)のシェリング的哲学に歴史哲学を求めることは大変無理である。ところが後期シェリングはモスクワにシェリング哲学心酔者集団『愛知者』会を1823年に産みおとした、そのメンバーは B. Ф. オドエフスキー、И. В. キレエフスキー、С. М. シェヴィレフ、М. П. ポゴージン、А. И. コシェレフ、А. В. ヴェネヴィチノフ、Н. М. ロジャリン、В. П. チトフ、Н. А. メリグノフらである。このうち幾人かはスラブ主義者に、幾人かは官許イデオログになり、さらにこのサークルを支配したシェリング啓示哲学は A. И. ホミャコフ、K. C. アクサーコフ、Ю. Ф. サマリンらのスラブ主義者が提唱するロシア宗教的歴史哲学へとつながり、革命的民主主義者の歴史哲学とは別個の大潮流としてロシア社会主義革命後まで遠々と流れて行く。このスラブ主義についてここで深入りするこ

とは差し控えよう、チェルヌィシェフスキーが後でスラヴ主義者を批判する時に主題にとりあげよう。ただここで概括的に言えば、スラヴ主義は古代ロシア、つまりピョートル大帝以前のビザンチンの専制政治とギリシア正教への憧憬とその復帰を希求し、ギリシア正教の精神的意味にシェリングの啓示哲学ないし宗教哲学をダブルさせることによって、西欧主義に対するにスラヴ主義を、ゲルマン化にたいするにスラヴ国民性の強調を、近代的議会政治に対するに教会政治を、近代的産業に対するに封建的な共同体の土地所有を、物質主義に対するに精神主義を主張し、いわゆるロシアの色彩の強い宗教的歴史哲学の一大潮流の源流となった。シェリング哲学は、こうみると、ロシアに自然哲学の流れと宗教的歴史哲学の流れをつくる機縁となり、この二面性が П. Я. チャーダーエフ (1794~1856) に集中的に表現される。彼は物質的世界と精神的世界との物心並行論の立場に立ち、シェリングの自然と主観との同一性の哲学を汎神論として拒否し、むしろ主・客の絶対的統一を説いたヘーゲルの客観的観念論の立場にアプローチした。それはヘーゲルが宗教を絶対理念の最高の自覚形態としたことに由来するものと言える。しかし、チャーダーエフの哲学的見地は矛盾に富んでいて、こうも言えるなら、彼は革命的民主主義とスラヴ主義との交流であり、また同時に両者の分水嶺ともなっている。ここでチャーダーエフの哲学的評価に深入りすることは差し控えてチェルヌィシェフスキー自身がシェリング哲学のロシアへの流入をどう評価しているかに論述を絞ることにしよう。彼のシェリング哲学評価は、1831年から1836年まで『テレスコープ』誌の編集を勤めたジャーナリスト、H. H. ナデージュデン (1804~56) の評価と結びついている。『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者のシェリング哲学の位置付けはロシアの文芸評論活動のなかでなされる、彼によればゴーゴリ時代の文芸評論の大成者はベリンスキーであるが、ナデージュデンはベリンスキーの師であって、クーザンの折衷主義によったパレボイと比較して遥かにまさるジャーナリストにしてロシアの文芸評論の最初の定礎者である。そしてナデージュデンの功績は、

美学評論にドイツ哲学を採り入れ<sup>ポエジー</sup>文芸を理念の発現形態と見做した点にある、つまり、理念が芸術作品の種子でかつその成長を司るという観念に立って、芸術作品と理念との有機的な連関を初めて究明した。チェルヌィシェフスキーによると、ナデージュヂンの哲学原理はフィヒテ、シェリング、ヘーゲルの全ドイツ哲学をつらぬいた理念の哲学であり、とりわけシェリングの哲学に依拠し、独自に彼を克服してヘーゲルにアプローチした。たしかにナデージュヂンは、一方ではチャーダーエフの『哲学書簡』(1836)を『テレスコープ』誌に載せるという大胆な自由主義的な啓蒙的ジャーナリストであり、他方君主制とも折合って神哲学が最高の成果であと見做す保守性を示したシェリング主義者であった、しかし、チェルヌィシェフスキーのナデージュヂン評価はシェリングの『芸術哲学』の彼の受容とつながっているものである。普通 H. M. カラムジン (1766~1820) や B. A. ジュコーフスキー (1783~52) の美学の源泉がルソー、シェフツベリ、シラーの情感的美学論であったのに対して、ナデージュヂンはそれをシェリングの芸術哲学に求めたロシアの最初の人であった。この点を考慮すれば、チェルヌィシェフスキーがロシア文芸批評確立の立役者としてナデージュヂンを称揚し、シェリング哲学をその原理に据えた点を評価したことは正鵠を得ている。しかし、スタンケヴィッチ会においてシェリング哲学はヘーゲル哲学に席を譲り、さらにゲルツェンやチェルヌィシェフスキーの時にあってヘーゲル哲学がフォイエルバッハに席を譲った段階にあっては、シェリングはもはや「蒙昧主義のシンボル」であると彼によって酷評されたのは歴史の当然の成行きであった。

シェリングのもつ二面性は、前述の如くロシアに一方では自然哲学を産みおとし、他方においてスラヴ主義の宗教的歴史哲学を産みおとす機縁をつくったが、前者の潮流はまずスタンケヴィッチ会に流れこみ、この会のなかでシェリング哲学からヘーゲル哲学心酔の気風がつけられた。この会の気風がヘーゲルの晩年の作『法哲学』にみられる「現実的なものは理性的である」の

テーゼに支配されるので、ロシア哲学・社会思想上とりわけ重要な研究対象となっている。そしてまたこの会から後にはなばなく活躍する色いろな肌合いの思想家が生まれているので等閑視できない。この会の性格にふれよう。この会はスタンケヴィッチを頭として1831～32年頃につくられ30年代末まで続いていた、専らドイツ哲学を研究するものであった。この点で前に述べたペトラシェフスキー会とその性格を異にしているが、メンバーの点ではペトラシェフスキー会同様、毛並がまちまちであった。シェリング主義者のパヴロフに師事し、ナデージュチンに感化を受けてシェリング哲学から出発してヘーゲル哲学をロシアに最初に移植した H. B. スタンケヴィッチ (1813～40)、ヘーゲル哲学との和解を克服して革命的民主主義的評論の父祖となった B. F. ベリンスキー (1811～48)、既に1841年ドイツに脱出し青年ヘーゲル左派のルーゲらと接し『ドイツにおける反動』(1843)を書き、その後無政府主義者としてマルクスと対決した M. A. バクーニン (1814～76)、ロシアの啓蒙主義的歴史家 Г. Н. グラノフスキー (1813～55)、西欧主義的自由主義的評論家にして『イスペインアについての手紙』(1847～51)の著者 B. П. ボトキン (1811～69)、自由主義者から後期シェリングの講義を聴いて官許イデオログに転向した M. И. カトコフ (1818～87)、スラヴ主義創始者の大立物 И. В. キレエフスキー (1806～53)、ロシア正教と国民性を高唱した K. С. アクサコフ (1817～60)と A. С. ホミャコフ (1804～60)と Ю. Ф. サマリン (1819～76)と言った錚々たる面々である。一口で言えばこの会は概してヘーゲル主義者によって構成されていた。ゲルツェンは『過去と思索』のなかでこの会の全般的知的雰囲気の評していうには、彼らは哲学的体系の図面を開いて自己分析にふけり、はなやかな汎神論に安住していたがキリスト教を排除していなかった、と。そしてスタンケヴィッチについては、実践的な問題よりも瞑想的、思弁的思考をこととした空想家であった、と記している。これは確にゲルツェンの政治的色調の強い会と対比しての上での評であろうが、真理をつたえている、というのは彼の哲学は精神的啓蒙の哲学であったからである。

スタンケヴィッチにとっては哲学とは人間の信仰・信念や生活目的を厳しく論拠づけることであり、そのためにはシェリングやヘーゲルの「普遍的生」や理念のもつ自己覚醒、自己理解の方法が重きをなす、——自己を全体において意識する生、理性的および自由な生は、自己を個々において意識する生であり、理性的な自由な生である、と。自然の基本的感性としての愛を倫理の原理に据えて、愛による人々の葛藤の調和を生であるというかなり倫理的性格を強くしていた。スタンケヴィッチの歴史的意義は、ロシアが近代化に向う際の近代的〈自我〉の確立であり、それをシェリングやフィヒテやヘーゲルの哲学(理念の哲学)に求めて哲学的啓蒙主義を敷いた点にあった。彼の言う意志の自由にしろ、生が愛であるという観念論的言明にしろ、所詮は真の道徳的人格の形成、自己本分の自覚による善行の遂行(『我が形而上学』(1833))という倫理的・哲学的啓蒙に尽きるのである。従って農奴・専制への抗議もこの視座からなされ、自由な人格の成長と自己覚醒を妨げる農奴法を糾弾し、「啓蒙君主」ピョートル大帝の改革を是認する。しかし何よりもまず人民自身の教育による覚醒が、革命よりは啓蒙が先決であるとしている点では、一応18世紀啓蒙主義の理性主義に与す立場にあった。この点で変革を希求してやまなかったゲルツェンによって瞑想的思弁家と特徴付けられるわけである。なるほどこのスタンケヴィッチ会の主な研究の重心は哲学にあったが、この哲学の研究とロシアの文芸評論活動とは内的構造を作っていて、ベリンスキーに集中的に表現されたように、ドイツ哲学とロシア文芸評論の活動とは切っても切れない関係にある。『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者のスタンケヴィッチ評価は、実を言えばこの点にあった。シラーの美学(“Schöne Seele”)のロシア作家、評論家に与えた影響を度外視することはできない。スタンケヴィッチは「芸術は私にとっては神となる」、「芸術は神の認識の第一段階である」と言うほどのシラーから影響をうけたロマンチストであったのである。理念の自己展開としての理念の自覚過程は自然や人間社会や人間の現実的総体において顕現する過程であるというヘー

ゲルの論理は、ある時代の作家（小説家）の作品はその時代の精神の芸術的表現ないし顕現であるという論理につながる。これを推せばゴーゴリの文学はゴーゴリ時代の社会的意識の必然的表現となる。『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者はいう、——スタンケヴィッチの出現までは作者は自己の「世界観」と作品との連関がつかめず、生活によって喚び惹かれた文芸と生活とは相互に絶対的に独立していて無関係のままであった、作家の「世界観」が作品のなかに「生きた理念」として活かされることがなかった、と。スタンケヴィッチは明らかにシュリングとフィヒテを経てヘーゲルに至った時、この関係を意識し、シラーのロマンチズムに影響されながら文学、文芸を時代精神との関係で把握するようになった。

しかし、ベリンスキーこそ「生きた理念」を文学作品のなかに貫徹させて文芸評論を確立した最初の人である。ベリンスキーにあっては、シュリングの「生命（生）」、ヘーゲルの理念の「生活」は、もっと具体的な時代のなかに生きる人間の現実的生活——彼は観念的生活を完全に拭い去ってはいないが——に下降し、そしてゴーゴリの作品が当時の農奴制社会の人間の形象を描き出したように、理念の生活はロシアの生ま生ましい生活の具象性を帯びる。ベリンスキーをヘーゲル哲学に接近せしめたのはかのバクーニンであった、ゲルツェンの筆を借りれば、バクーニンはカント、フィヒテの著作によってドイツ語を知り、それから1837年に『精神現象学』『論理学』『宗教哲学』『法哲学』を読み耽ってヘーゲルの囚になり、理性は世界の唯一の無限な実体であり、同時に実体を認識している唯一の主体であり、唯一の原因であり、唯一の目的であり、全存在の始め、中間、終りである、と喧伝した文字通りのヘーゲル心酔者であった。ドイツ語を知らなかったベリンスキーがバクーニンによって鼓吹されてヘーゲリアンになったことは疑いの余地ない、丁度この頃のバクーニンは『法哲学』のかの有名なテーゼをそのまますんなり受け入れ、現実を理解することと愛することとは同じことであり、現実に抗して蜂起することは生活のすべての生きた源泉を自分のなかで殺すことと

同一のことである、したがってあらゆる関係とあらゆる生活領域において現実と和解することが当代の偉大な課題である、ヘーゲルもゲーテもこの和解の、死から生への回帰の大先輩であった、と吹聴して廻った。「現実的なものは理性的である」のテーゼの「現実的なもの」は「現存するもの」と同一だとみたバクーニンの解釈は、また30年代ベリンスキーのそれでもあった。『ロシア文学のゴゴリ時代概要』の著者は『モスクワの観察者』誌に載った『ヘーゲルのギウナジウム講義』翻訳への序文(バクーニン著)を長々と引用して、バクーニンのヘーゲル心酔ぶりのみならず、この同人雑誌がヘーゲル哲学普及の機関誌になり、これをとりまくメンバーが全く哲学だけに生き、昼夜哲学を論じ、人が集まれば万有を哲学的観点から観察し解決し、そしてヘーゲルの弁証法の驚嘆すべき力によって若き世代はことごとく熱狂し、皆真理の予言者になる義務感をもった、と当時のヘーゲル熱病を描いている。しかしスタンケヴィッチがヘーゲル哲学と文芸評論との結びつきを持ったのに対して、バクーニンにあってはヘーゲル哲学は歴史的存在の哲学、いわゆる歴史哲学として受容されている点に注目しなければならない。そしてベリンスキーこそスタンケヴィッチとバクーニンの両面を結合している思想家といえるのである、つまり、彼はナデージュデン、スタンケヴィッチの文芸評論活動とヘーゲルの歴史哲学を彼なりに焼直しているのである。『ロシア文学のゴゴリ時代概要』の著者によれば、一時ヘーゲルの天才的な弁証法はスタンケヴィッチ会すべての人の眼を眩惑させたので、この弁証法から導出された体系も恰も必然的帰結として受け容れられ、よってベリンスキーは理論的冥想に沈潜し、何が現実的生活でなされているかに全然眼を向けなかった、そして現実とはどんな空<sup>ファンタジー</sup>想よりも意義あるものであると認めはするものの、観念論者の眼で現実を眺めそれを研究するというよりは現実のなかに自分の理想を持込んで、今度はこの理想がロシアの現実と照応していて、すくなくともロシアの現実のいくつかの重要な要素はヘーゲル体系のなかにある理念と類似したものであつたと確信した、と。これがいわゆるベリンスキー

の現実との和解の一時期である。ゲルツェンもこの頃のベリンスキーの姿を、闘いかわりに瞑想のインダの静寂と理論的研究を説き、専制政治も理性的なものとして存在しなければならないと考えていた観念論者であったと描いている。実にヘーゲルの『歴史哲学』にしろ『法哲学』にしろ、そこに一貫して流れている根本思想は、歴史というものは絶対理念（絶対者、神）が自己実現、自己顕現しながら自己認識して行く過程そのものであって、いわばこれは不可避的な自己法則として歴史を貫ぬく。歴史が必然的な法則によって自己展開することが自由の獲得の、つまり必然性の認識の歩みであり、これが理念の歩みそのもの、自己完成の歩みそのものである。世界史は個々人の得手勝手の恣意などによって動ずるようなものでなく、絶対理念の必然的な自由獲得の歩みであるとの見方は、『法哲学』の「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」というかのテーゼに端的に表現される。現実的な歴史そのものが理念の論理的歩みそのものであるなら現実を概念的に把握することは理念の必然的歩みそのものの把握になる。このテーゼは見たところ現実に存在するものはすべてそのまま理性的に肯定的なものであるとも受け取られ得る可能性を秘めている。確かにヘーゲルがプロイセン国家を絶対理念の実現されるべき場とした点で、現実肯定に徹したとも取れる。しかしヘーゲルはかならずしも悪、偽、偶然までをも現実的なものとして肯定的に見たとは言えない。ところがこの有名なテーゼは、明らかにロシアのインテリゲンチヤにとっては「現実的なもの」を「現存する一切」というように誤って解釈した。ベリンスキーは、したがって、現実的に存在する農奴制も専制も、ありとあらゆるロシアの悪も、絶対理念の必然的帰結であるから、個々の人間にとってはいかんともしがたい、否定すべくもないものとして受け入れたわけである。普通このベリンスキーの現実との和解は、「強制的」和解と言われているが、そうせしめた一因には上記のような「現実的なもの」を「現存するもの」とする誤解にもあったろうし、何よりもチェルヌィシェフスキーが述べたように「天才的な弁証法」がロシアのインテリゲン

チャを魅了してしまったことにあったのである。ところが40年代初頭には早くもこの「強制的和解」から解かれる。バクーニンをして「破壊の情熱は、同時に創造的情熱である」と宣明せしめ、弁証法こそ否定と闘争であり、矛盾のなかに、肯定の否定のなかにこそ全体性があると言明せしめ、否定こそ不自由の否定のことであり、現実を「破壊」する原理であるとしてかくも弁証法の否定の意義を重視せしめたものは何か。一口で言えば、彼をして瞑想的な「純粹」哲学から「現実的な活動」の哲学に至らしめたのは何か。その一因には明らかに彼の青年ヘーゲル左派、ワイトリング、ヘルヴェークらとの接触が考えられる。しかし、ベリンスキーのヘーゲル熱病からの覚醒はバクーニンの如き方法によるものではなかった。『ロシア文学のゴゴリ時代概要』の著者の特徴づけによれば、この覚醒は、ベリンスキーが瞑想のモスクワから喧噪のペテルブルグへ移ったことによって起された。ペテルブルグ、ゲルツェンをして言わせしめれば、これこそ新しいローマであり、世界的奴隷制度のローマであり、絶対主義の首府であった。ペテルブルグの喧噪な、専横を極めた現実がヘーゲルのかのテーゼの検証の場を彼に提供したのである。彼はロシアの現実が決して理性的なものに貫められていない非常に多くの有害な要素を内蔵している現実であることを悟った、彼にはヘーゲルの哲学の体系が、実は生血を吹うモロフの神の如く、一切の生あるものを殺してしまう代物であることがわかった。こうして彼は30年代末を境にしてヘーゲルの思弁性を脱して「生活の哲学」を築き始め、これをもってゴゴリ時代のロシアのリアリズム文芸評論を確立するのである。ベリンスキーは1843年、『小ロシア史』(H. A. マルケヴィッチ著)の書評でドイツ哲学の歩みのあらましを次のように述べているが、これは彼のドイツ哲学の発展の理解のほどを示すと同時にまさしく彼が歩んでたどりついた道のスケッチでもある。——人は哲学の下にことの本性上冷ややかな、ひっからびた、感情を打ち消した本質を了解してきた。事実、一見したところ皆この見解の肩をもった。差当り哲学が自らの偉大な事業を開始したばかりの当初は、当然のことだっ

た。哲学が生活からかけ離れていて自己の殻に閉じこもっておって、理性を働く力として、また思想を理性の対象として分析することに耽っていたからである。ここから哲学の禁欲主義、その冷徹なひっからびた性格、その味けない独身生活がでてきている。近世哲学の父カントは、思惟の対象が思惟自体であり、働く力が理性であるといった思惟活動の最初の完成者であった。フィヒテ哲学の内容はもうすでもっと一般的なものであって、彼は哲学の面では、自ら全くの一面性にまで至らしめた主観的精神の正当さを嘶し立てる雄弁家となった。シェリングは同一性という偉大なる理念のなかで、フィヒテの「自我」と客観的世界との和解を示して見せた。最後にヘーゲルの哲学は、普遍的生のすべての問題を内にかかえこんだ、そしてたとえこれらの問題に対するヘーゲル哲学の答えが、もはや人類の過ぎ去りし苦悩の時代のものになっているにせよ、それにしてもヘーゲル哲学の厳格な深奥な方法〔弁証法〕は、人間理性を意識させる大道を拓いたもので、目的地にたどりつくまでにヘトヘトになってしまう曲りくねった迂回路を人類に回避させてくれた。ヘーゲルは哲学から学をつくった、新時代のこのもっとも偉大な思想家のもっとも大きな功績は、その思弁的思惟の方法——彼の哲学の諸結果〔体系〕に由来する今でこそ欠陥もあり偽なるものをこの方法を基にしたのみ反駁もできるといった正しい堅固な方法——にあった。つまりヘーゲルは自らの方法を変えた時にこそ応用においても誤りを犯す羽目に陥ったのである。ヘーゲルその人において哲学はその最高の発達に至ったが、同時に哲学は生活に無縁な秘教的な意義として終熄したのである。生成し強固となった今日の哲学は、独り静かに自己認識に身をやつすために余儀なくそこから逃れたかつての喧噪な生活の中に立ち帰ったのである。哲学と実践とのこの豊穡な和解の始めは、今日のヘーゲル左派において行なわれた。この和解は目下哲学を従えている諸問題のもつ生活性〔жизненность 生活の視点〕によって明らかになった、また哲学が次第に自己の重苦しいスコラ主義的言葉を放棄することによっても明らかになった、また哲学が己れに反対する論敵をもつ

のもはやある学派やある著物のなかにおいてでないことによっても明らかである。今やすでにこれは自己のことだけを識り、特殊な利害だけを敬う学派の哲学でもなければ、書物の哲学でもない世界の意識が哲学の内容となるところのその世界に無関心な冷淡な哲学ではない、否、今や哲学は理性の如く厳格で冷徹で冷静でなければならない、しかしそれと同時に文芸の<sup>ポエジー</sup>ように靈感的で、愛のように情熱的で情深く、信仰のように生き生きして高尚で、偉業のように威力をもち勇敢でなければならない、と。このベリンスキーの見地の大約は『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者チェルヌィシエフスキーの見地と同型写像である。おそらく後者は以上長々と引用した前者の章句を熟知していたと思われる。スタンケヴィッチ会はシェリング哲学を経て、ヘーゲル哲学の心酔に終わったが、この会の解散後、各メンバーは一方ではスラヴ主義者や官許イデオログに流れるが、他方ベリンスキー、バクーニン、ゲルツェン、オガリョフらは革命的民主主義の流れをつくる。この後者の流れは勿論50~60年代の革命的民主主義者チェルヌィシエフスキー、ドヴロリユーボフ、シェルグーノフ、アントノヴィッチ、フレロフスキー、セルノ・ソラヴィエヴィチ、ミハイロフ、ピーサレフ、ラヴロフらにおいて奔流をかたちづくるが、その哲学は一口で言えば「生活の哲学」「生活のための哲学」である。この「生活の哲学」こそ、ロシアのインテリゲンチヤがヘーゲル哲学を批判した上で得た成果であり、それをなさしめたのがベリンスキーやゲルツェンらであった。バクーニンが40年代初頭を「新時代の前夜」と規定したのも、彼が「否定の弁証法」を基軸にして静観する理論から活動の哲学への転軸可能をみて取り、また真理というものを理論のうちにではなく活動のなかに、生活(生命)そのもののうちに、つまり単に思惟するのではなく生きることに求めて、実践行動につ走っている時代の趨勢を読み取ったからである。バクーニン自身この新時代づくりに身をもって体験したことは言うまでもない。ベリンスキーも『文学的空想』(1836)のなかで文学・文芸と人間・社会との関係を捉えるに、全宇宙、全存在は多様性における統一

であり同一の理念の無限な変容の鎖にはかならないとするシェリング哲学の普遍的「生命」の原理ないしは芸術哲学を梃子に用いている、そして、この「生命」の抽象的原理はヘーゲルにあっては自己自身が自己展開して世界を開示してゆく理念に昇る形を、思惟においては明らかに思弁的弁証法の形をとっていた。したがってヘーゲルの思弁的弁証法が人間の「生活」と決して無縁なものでなく、それが書物や思惟にのみに限られてそこに閉じこめられていたものを現実的な生活にただ解放すること、そのことに彼の任務があったわけである。この意味でシェリングの普遍的「生命」とヘーゲルの「生命」——周知の如く、ヘーゲルの『論理学』にあっては「生命」(Leben)は主観性と客観性との統一としての理念のなかで概念的に把握されるものである——を、現実的な人間の実践上の「生活」概念に転載することがベリンスキーの役目であった。この「生活の哲学」の錬製に与って力あったものは、まず第一に喧噪なるペテルブルグであるが、ゲルツェンやヘーゲル左派の見地、とくにフォイエルバッハの哲学も作用しているとみられる。フォイエルバッハがもっとも哲学的に、理論的に人間の地上的な具体的生活、感性的に把握される現実的な人間の生活概念こそ真理であると当時宣明していた人であつたればこそ、彼のこの地上的な生活概念が、ロシアの現実とヘーゲルのいう理性的なるものとの矛盾対立およびその打開に苦悩していたベリンスキーやゲルツェンに作用しないはずがなかった。

チェルヌィシエフスキーこそこの「生活の哲学」の正当な嫡子者であることは『芸術と現実との美学的関係』(1853)の有名なテーゼ、「美は生活なり」や『ロシア文学のゴゴリ時代概要』(1856)における文芸における人間の生活の重視のなかにはっきりと見てとることができる。『ロシア文学のゴゴリ時代概要』の論作はまさしくこの生活の視点からベリンスキーのリアリズム的文芸評論におけるヘーゲルの意義を評価するのである。彼によればナデージュデンがシェリングの理念を文芸評論に持ちこんだ人とすれば、ベリンスキーは前者のロマンチズムの薰陶を得てさらにヘーゲルの理念を利してゴ

ゴリ時代の評論に新天地を開いたのである。ベリンスキーは『批評について』(1842)の中で言う、——どの作品もかならず時代との関係において、歴史的現代性との関係において、また社会や芸術家との関係において考察しなければならない、作家の才能、時代の精神、社会の精神、が美的創造の力に与るのである、と。このベリンスキーの文学・詩の社会意識の把握の見地をチュルヌィシェフスキーはヘーゲルの理念を考慮した上でさらに展開してこう述べる、——ゴリ時代の評論が何を為さねばならなかったかを解明する人には次の事は難なく了解の行くものである、つまり評論の性格が全くロシアの歴史的状态に依存していたということである。この時代の評論の代表者はたしかにベリンスキーの役目であったにしろ、彼の個性は歴史的必然性が要求したものにはかならないわけである。彼がかくなる人物として存在しなかったにしてもこの不屈な歴史的必然性は、名こそ違いはすれ、また人物の特徴こそ違いはすれ、同じ性格の別の奉仕者を見出したことであろう。歴史的要求は人々の活動を喚び惹き、彼等に力をさずけるが、自らは特定の人に服するものでもなければ、特定の気に入るように節を変えるものでもない。深遠なる金言にしたがえばく時代が自己の召使いを欲しているのである、何人かいるうち一人を要求するのである。思想は全くベリンスキーの時代に帰属する、ただ思想がうまく強く表現されるか否かは彼の個性に依存するものである、と。ベリンスキーのヘーゲルの哲学による「現実との和解」は確かに現存する制度、ツァーリの肯定にまでつながるものであったが、決して全面的な否定——何ら積極的なものを産み出さなかったという否定の意味——として評価すべきものでないし、またベリンスキーが「生活の哲学」にアプローチした時、ヘーゲル哲学の一切を放擲してしまったとするのはあまりにも速断である。チュルヌィシェフスキーが正しく評価しているようにヘーゲル哲学は明らかにロシア文芸評論の確立に積極的に作用したのである。ベリンスキー自身が先きの『小ロシア史』の書評で評価した如く、「ヘーゲルは哲学から学〔科学〕をつくった、新時代のこのもっとも偉大な思想家のもっ

とも大きな功績は、その思弁的思惟の方法、正しい堅固な方法にあった」のである。成程、『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者が性格づけたようにヘーゲルの「驚嘆に価する天才的な弁証法」、「思惟の弁証法的方法」はベリンスキーの眼を眩惑させ「鑑でかたまつた不滅の体系」と矛盾するものであることをひととき理解させなかったにしろ、ゲルツェンがいうように、ドイツ哲学を学んだこの最初の才能あるロシア人は、二元論の不合理がとかれるや否や、この哲学が言葉の上でのみ現実的であり、その基礎においては依然として地上の宗教、天国なき宗教であり、抽象の世界にひきこもるためのかくれ家となる論理的修道院であったことを誰よりも先きに指摘した人なのであり、つづいてベリンスキーは「生活の哲学」の基盤から人格を全面的に解放する社会主義をも志向したのである。

「生活の哲学」のベリンスキーにもまさる推進者は、ヘーゲル弁証法の手品を「革命の代数学」たらしめたゲルツェンであった。チェルヌィシエフスキーがゴーゴリ時代の転回点の思想家として特徴づけたように、ゲルツェンこそドイツの驚嘆すべき哲学を歴史の発展の主要な舞台であるフランスの「歴史的な生活」に結びつけるといった青年ヘーゲル左派と同趣の試みをして成功を収めた世界の思想的趨勢に合致したロシアの偉大なる思想家なのである。ゲルツェンはフランスの文化・歴史に強い影響を受けて「生活の哲学」を強く推進させたのである。この点でチェルヌィシエフスキーと酷似している。30~40年代初頭のゲルツェンは、チェルヌィシエフスキーの性格づけ通り、西欧の主要な思想的・歴史的流れに乗った、つまり30年代初頭においてサン=シモン主義、フーリエ主義を受容する一方シェリングの自然哲学に情熱を燃し、つづいてスタンケヴィッチ会と接触するなかでヘーゲル哲学を40年代初頭に識る。何よりも特異なことは、これこそドイツ哲学とフランス社会主義の融合のすぐれた試みであるが、『精神現象学』と『キリスト教の本質』の耽読と併せて『貧困の哲学』(1840)を精読していることである。『科学におけるディレタンチズム』(1842~43)はそれらの研究途上の論

著である。更に注目すべきことは、ゲルツェンが1839年7月28日付でA. J. ヴィトベルクに宛た書簡、——私達がお別れしてからずっと私は非常に沢山のことにかかずりました、特に歴史と哲学にです。なかでも私は「今世紀は過去と未来のいかなる環か？」をテーマに学位論文に手をつけたのです。突然、ベルリンで出版された“Prolegomena zur Historiosophie”とかの代物に目がとまったのです。いま書き写しているのです、私がどんなに欣喜雀躍したか御推察下さい。著者に全面的とも言えるほど賛成しています、と。この著者はチェシコフスキ A. Cieszkowski (1814~94) であり、その論著は1838年に発表された『歴史哲学序論』である。彼は青年ヘーゲル左派にあって未来の哲学は「行為の哲学」であることを提唱し、ヘーゲル哲学の批判の上に立ってフランスの空想社会主義とドイツの哲学の融合・綜合を試みた最初の人である。ゲルツェンの当時の最大の関心が歴史と哲学との、フランスとドイツとの、社会主義と哲学との、融合・綜合であったことはこのことから一目瞭然である。一口で言えば、チェシコフスキが意図したような未来をつくるための「行為の哲学」としての歴史哲学である。『科学におけるディレタンチズム』『自然研究書簡』(1845~46)にはいまだゲルツェンの歴史哲学は表立って現われないが、彼の心中深くに伏在していてそれは1848年革命の敗北後に突如としてロシアの装いをもって出現する、いうまでもなく〈ロシア社会主義〉である。この点に深く立ち入ることは差し控えよう、チュルヌィシエフスキーの学生時代の知的土壌と直接の関係がないから。むしろ学生チュルヌィシエフスキーが目を通したとされるゲルツェンの40年代初頭の論著の思想的傾向にスポットを当てよう。チェシコフスキの「行為の哲学」の見地、つまり観念を現実化すること、理論を実践に移すこと、観想するのでなく行為することの見地は『科学におけるディレタンチズム』や『自然研究書簡』に活かされていることは疑いの余地ない。何故ならこの二論著の中心思想と彼の強力な提唱は、ヘーゲルの形而上学的抽象的思弁性および思弁的弁証法の現実的生活への解消、理性的リアリズムへの解消、すべ

ての人間の行動および見解の生命的源泉への還元、思弁的ロマンチズムおよびディレタンチズムの現実的人間生活への止揚、学者および芸術家世界の大衆世界への転換、そして理論から実践へ、言葉から事行へ、純理論から応用論理学へ、イデアリズムからリベラリズムへ、スコラ哲学的性格から現代科学へ、空想から現実性へ、精神と物質の調和的發展から闘争的發展へ、知識の貴族性から生活のための知識の大衆性へ、哲学と生活の分離から両者の融合へ、書齋の生活から実践的・行為的生活へ、であったからである、——一口でゲルツェンの言葉で言えば、「生活の中へ」であったからである。ゲルツェンの言葉をかりればロシアにおけるヘーゲル哲学のリアリズム的(唯物論的)焼直しはこうである、——知識をいかほど加え算しても、それが一つの生きた焔のまわりを生きた血肉となって包まない間は、すなわち自らその焔の肉体として理解するに至らぬ間は、未だもって科学は成立しないのである。他方、どんな輝しい普遍性も、もしそれが抽象的概念の氷の内に閉じこめられていて、具象化する力、類から種へ、普遍的なものから個人的なものへと展開する力をもたないならば、またもし個体化の必然性が、もし事件と行動との世界への移行がその抑えることのあたわなない内面的要求の中に含まれていないならば、それは完璧な科学的知識を成さないであろう、と。確かにゲルツェンのこの両論著にはシェリングの自然哲学・芸術哲学とヘーゲルの哲学用語とが未だ混在し、「リアリズム」と言った如きゲルツェン流の用語が「唯物論」なる用語に先行して、シェリングやヘーゲルの哲学を完全に唯物論的に錬製し直しているものでないにしろ、ゲルツェンの意図は明らかにチェシコフスキの「行為の哲学」を梃子として「生活の中へ」の哲学、である『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』の著者の言葉で言えば、ゲルツェンとオガリョフの「注目は国民生活とじかに関係する科学に向けられた」のである。ゲルツェンはスタンケヴィッチやベリンスキーのようにヘーゲル哲学に心酔することなく『法哲学』のテーゼは、彼にあっては、もし現存の社会秩序が理性によって正当化されるものであるならば、この秩序にたいす

る闘いもそれが現存する限りにおいて正当化されるものであるという風に解せられた。そしてヘーゲルの弁証法が現存するもののすべてを打ち壊す恐しい破城槌となり、理性の邪魔物をすべて溶解し蒸発させる劇薬となるためには、ゲルツェンによって現代の叡智者の第一任者と評されたフォイエルバッハの『キリスト教の本質』が、チュシコフスキーの『歴史哲学序論』に勝るとも劣らない力として彼の哲学形成に資して与ったことは論ずるまでもない。フォイエルバッハの哲学に哲学と自然科学との、人間的感性と人間的理性との、経験と思弁との統一を見出し得るし、人間の地上的生活と感性的利己としての個人の主張を発見し得るからである。

以上学生チュルヌィシエフスキーが拠って立っていたロシアの哲学的地盤を知るために、ロシアへのドイツ古典哲学の流入とそのロシアの進歩的インテリゲンチヤによる焼直しの進展相を内挿したが、ここで再び学生チュルヌィシエフスキーに立戻って彼の座標定位と初速度決定の問題について言及しよう。実を言えば、以上の考察でこの問題を浮彫りにする作業はほぼ尽きたのであるが尚若干の触れておかなければならない二三の点が残っている。チュルヌィシエフスキーの歴史哲学観のその後に展じられる元ともいえる世界観形成の座標定位と初速度決定の全体像を描くに当って、筆者は彼の無制限君主制の階級協調的博愛的政治観の自己批判はいかにして可能であったかの設問に絞って論じ、その可能たらしめたものにフーリエの『四運動』『普遍的統一の理論』とペトラシエフスキー会の思想およびその事件と『キリスト教の本質』に求め、さらにロシアの哲学的地盤を固めたベリンスキーやゲルツェンの仕事や哲学にも求めてきた。そして主として彼の歴史哲学を中心にしてではあるが、彼のその後(第二期(1853~56)、第三期(1857~62))の活動と理論の大かたのものはすでに彼の学生時代に芽ばえていたこともたびたび述べて来た。その際学生チュルヌィシエフスキーが、西欧の彼の崇拜者としてルイ＝ブラン、プルドン、フォイエルバッハ、レッシングを選定したことが偶然な成行ではなく、彼の世界観形成の特徴を示す必然的なものであるこ

とも述べて来た。しかし、何故ドイツの18世紀の劇作家レッシングを崇拜者に仕立てたかについては、主題である歴史哲学から若干それる恐れがあったので故意に避けてきた、それに彼が三人の崇拜者のなかにレッシングを仲間入りさせたのがかの1850年1月20日の自己批判より約一年後であったこともあって避けてきたのである。もっと正確に言えば、彼が友人ミハイロフ宛の書簡でレッシングを自己の崇拜者として表明したのは、既にペテルブルグ帝大を卒業して半年も経過しようとしていた1851年2月のことである。この意味合から、彼の座標定位と初速度決定においてレッシングが大きな役割が演じられているとは見ななかったのである。現に無制限君主制の階級協調主義的博愛主義的政治観を自己批判に付している同じ日の日記に表明されている文学観では、ゴーゴリ、レールモントフ、ディケンズ、ジョルジュ・サンド、ゲーテ、シラー、フィーリングが有数な俊秀な作家として掲げられてはいるが、レッシングが欠けているのである。ところがチェルヌィシェフスキーの活動の全貌を通観するならば、彼の第二期はまさしく芸術哲学(唯物論的美学)と文芸評論活動のはなばなしい時期であって、むしろ歴史哲学(空想社会主義の哲学)は影をひそめ、もしこうも表現できるなら1857年まで伏流しているのである。何故伏流しなければならなかったかについては後論で詳述するが、ただここで簡潔に言えばこの時期ははまだペリンスキー事業の継承のゴーゴリ時代であり、「上からの解放」までにはかなりの距離があって、ロシアの政治的・社会的近代化の方途についての問題ははまだ焦眉のものとなっていなかった。それはさておき、ともかく第二期は芸術哲学と文芸評論の両者の時期であり、学生時代に出来ていた萌芽がのびて立派に花をつけ、ロシア文芸思想上確固不動の記念碑を遺したのである、前者芸術哲学はフォイエルバッハの哲学を用いてヘーゲルの美学を唯物論的に改造した、博士号請求論文『芸術と現実との美学的関係』(1853年作)であり、後者は大著『ロシア文学のゴーゴリ時代概要』『プーシキン、彼の生涯と作品』『バルザック』『幼少年時代。トルストイの戦争物語』(以上1856)大著『レッシング、

彼の時代、生涯、活動』(1856~57)『シチュドリーンの〈県の記録〉』(1857)の一連のベリンスキーの事業の継承である。チュルヌィシェフスキーがレッシングを崇拜者に掲げたことの実は、その浩瀚なレッシング伝で了解のゆくものである。これらの第二期の有数な著作は決して突如として出現したものではなく、すでに学生時代にその素地が十分に出来上り、しかも重要なことであるが文学を純粋文学として、芸術を「芸術のための芸術」として考えず、むしろベリンスキーの如くに文学や文芸評論を時代の精神として、国民意識として、社会意識の一形態、否なしる政治的啓蒙としてすら考えていたことである。このこととレッシングを崇拜者にかかげることは決して無縁なものではなく、深いつながりがある。学生チュルヌィシェフスキーが読んだ内外の小説、戯曲、評論類は、日記の中に見出されるだけでも歴大なもののにほり、枚挙にいとまないが、主要なものだけ列記して当時の彼の文学青年ぶりと文学的傾向を知るよすがとしよう。自国ロシアのものでは、ゴーゴリ『検察官』『死せる魂』、レールモントフ『現代の英雄』、プーシキン『ボリス・ゴドノフ』、ペトラシェフスキー事件以前のドストエフスキーの『白夜』を初めとするもろもろの短編小説、ゴンチャロフ『平凡物語』、ベリンスキー『ボリス・ゴドノフ論』、ゲルツェン『誰が罪か』、海外作家のものでは、ディケンズ『ドンビー父子』『ピクウィック・ペーパーズ』、フィールディング『ドム・ジョーンズ』、ジョルジュ・サンド『トゥヴェリーノ』『愛の妖精』、シューの社会小説、ゲーテ『ファウスト』『詩と真実』『ヘルマンとドロテア』『Mailied』、シェクスピア『ハムレット』『マクベス』、シラー“Wörter des Wahnes” “Die Piccolomni”、ユゴー “Marion Delorme” デュマの作品。その他『ドン・キホーテ』『ジェン・エア』、バイロン、シャトブリアン、ベランジュ、シュレーゲルらのもの。

これらの作家の中でチュルヌィシェフスキーの心を領したのは、ロシアではゴーゴリとレールモントフ、海外ではディケンズ、ジョルジュ・サンド、フィールディングらであった。彼はゴーゴリやレールモントフらの為したロシ

ア文学の意義をこうみた、——人民の生活のみが、人民の発達の程度が人類にとって詩(文学)の意義を規定するのである、そしてもし人民がいまだ世界的な、一般人類的な意義にまで至っていないから、一般人類的であるべきような、一般人類的資質を持合せるような作家というものも人民のなかには存在しないであろう。かくしてレールモントフとゴーゴリが証明したことは、知的活躍舞台で活躍する時代がロシアに訪れたということである、丁度フランス、ドイツ、イギリス、イタリアが以前にしたように。このチェルヌィシェフスキーの文学の国民意識観はまた師ベリンスキーの見地でもあった。さらに学生チェルヌィシェフスキーはペトラシェフスキー会員ハヌィコフと接してフーリエの著作などを読んでいた時分には、ベリンスキーの見地をもっとラジカルにしてこう言う、——美的情感教育の人間に及ぼす影響についての第一論文を、人間における諸力の統一の、絶対的統一の視点から書いてみよう。つまり人間の発展は不可避だ、どの人間も発展しなければならぬから。一面性は破滅を招く、不可能だ、それ故に人間が全てを進展させないなら、人間も発展しない、そしてこの同じ視点から美的作品〔芸術作品〕を語るであろう、美的作品は一つのこの情感にだけ奉仕すべきでない、これは空虚なことになろう、むしろそれと同時に常に真と善の〔課題〕を解決すべきである(真と善は決定的に同一であり、同一のものの二つの表現で、両者は切っても切れず、一者は他者なしではあり得ない)、そして常に美的作品の内容は生活から、時代の生きた諸要求から、社会を湧きたたせないしは湧きたたせるべきものから掬み取られたものでなければならない、したがって政治文学こそ文学の最高の様式である。そして作家は何よりも先ず、現在と過去について意見をもった人間でなければならない、と。この「政治文学こそ文学の最高の様式である」という見地には、シラーの美的教育論と初期のジョルジュ・サンドやシュエの社会主義小説とが奇妙に絡み合っていることは一目瞭然である。チェルヌィシェフスキー自身この如き政治小説の作家になろうという野心もあって、自らレールモントフ、ゴーゴリ、ディケンズ、ジョル

ジュ・サンドの心服せる友人と日記にしるしてもいる。彼が彼ら作家に強い共感をもったのは、彼らが上層階級にたいする下層階級の擁護者であり、悪と偽善にたいするにその徴罰者であり、そして何よりも、文芸と現実とのかわりに強い関心を示したからである。後者の点は数年後に『芸術と現実との美学的関係』として見事に結実するが、前者についてはどうか。フリーエやフォイエルバッハの著作を識り、ペトラシェフスキー事件やフランスの政治運動によってラジカルな社会主義者になり、間もなくしてかの自己批判を行う文学青年チュルヌィシェフスキーは1849年10月に、誠に彼らしい題名をつけた小説『理論と実践』を書き下している。この小説の発表に彼は非常な執念を燃したが、恩師ニキチェンコ（ロシア文学の教授）もジャーナリストのクラエフスキーも取り上げなかった所からみて明らかに駄作であった。しかしチュルヌィシェフスキーは必ずしも作家で身を立てようとしたものでないことはこの駄作を書く以前の1849年7月11日の日記に、希望として「数年も経ったらジャーナリストにしてルイ＝ブラン流の極左党の指導者かそれとも主要人物の一人になる」と書きしるしているところから知ることができるが、しかし学生時代に培われた政治小説の観念が決して霧消したものでないことは、彼の第四期（1862～88）の惨憺たる生活のなかで書かれた小説『何を為すべきか？ 新しい人間たちについての物語から』（1862～63）『アリエリエフ』（1863）『物語のなかの物語』（1863～64）『プロローグ、60年代初めのロマン』（1867～70）等々ではっきりうかがい知ることができる。

彼がレッシングを崇拜者の数に入れた機縁は彼の戯曲『賢者 ナー タン』（1779）である、彼はこれをペトラシェフスキー事件が発生して二ヶ月後に原書で読み、すばらしい、ドラマの形式と科白が気に入ったと読後感をしるし、そしてまもなくこれを訳して恩師ニキチェンコの所で朗読している。レッシングについては当時の日記のなかにはあまり語られていないが、ドイツ文学史の研究に手を染めているところから判じてドイツ文学とドイツの社会・国家との関係に多大の興味を抱いていたことがわかる。彼がロシア文芸評論活

動舞台上に雄々しく登場した時に、アリストテレス『詩論』の書評(1855)でプラトンもアリストテレスも芸術や特に文芸(詩)の真の内容が自然にはではなく、人間生活であると考えていたが、彼等以後にこう理解した作家はすぐれてレッシングである、と評しているところからするとチェルヌィシエフスキーにとってはレッシングはゴーゴリ、レールモントフのタイプとして映じたことは疑いの余地ない。1856年に大著『レッシング、彼の時代、生涯、活動』を書くが、その動機として、1856年9月24日付の H. A. ネクラーフ宛の書簡で次のように伝えている、——小生がこの概観を行うのは、ドイツ文学を国家〔社会〕的生活の原動力者として教示したいがためです、したがって、文学がいかなる状態で国家〔社会〕的生活と相まみえるかを見る必要があるのです。……あとうかぎり我が国内の事情と合致させて書くつもりです、このことは言及するまでもなく明らかなことです、と。言うまでもなくこの動機は学生時代に彼が抱いていた文学の社会意識的意義、社会生活における啓蒙的意義と同趣のものであり、ゴーゴリやレールモントフもっていた役割と同じ役割をレッシングもその時代においてもっていたとする評価である。エンゲルスがチェルヌィシエフスキーがレッシングの崇拜者であることを知っているの言明であるか否かは筆者は知らないが、彼が論文『亡命文学』のなかで、チェルヌィシエフスキーとドヴロリュエボフの二人を「社会主義的レッシング」と名付けたことは何とまあ奇異なとり合せで当を得た表現であろう。まさしく第二期のチェルヌィシエフスキーの活動は、「社会主義的レッシング」としてのそれである。

ペトラシエフスキー会潰滅直後、ペテルブルグには研究サークルらしいものは何一つ存在しなかったが、チェルヌィシエフスキーがかの自己批判をした1850年1月20日前後から И. И. ヴヴェージェンスキー(1813~55)を中心にサークルが出来、文学、教育、政治などの諸々の問題がここで論じられた。チェルヌィシエフスキーはこのサークルの主要なメンバーであり、丁度

卒業試験の準備にとりかかる一方、小説『理論と実践』を書き終え、ロシア文学の教授 A. B. ニキチェンコ (1805~77) のもとで卒業論文『フォンヴィーゲン「旅団長」について』に着手した頃である。彼が足繁くこのサークルに出入りするのはい自己批判直後からであるが、この会での熱心な討論と研究活動はほぼでき上っていた彼の座標定位と初速度決定に尚一層の力を添えたものとして無視しがたい役割をチェルヌィシエフスキーに及ぼした。このサークルについて多少論及しなければならない。

ヴヴェージェンスキーはチェルヌィシエフスキーと同郷の人で彼より一足先にペテルブルグ帝大哲学科を出た先輩で、ディケンズ、サッカレーの翻訳者にして教育者、ジャーナリストとして当時才腕をふるった。彼はこの夕べの会の「英雄」であり強い影響力を持っていた、そして大学卒業後の彼の就職斡旋に奔走した人でもある。このサークルには14、5名から20名近く集っていた、その主な常連はペテルブルグ・ギムナジウムで文学の教鞭をとり『ロシア文学概論』(1847)の著者で、ペトラシエフスキー事件にも関係した作家の A. П. ミリューコフ (1817~1897)、ゲルツェンとプルドンの熱狂的崇拜者にして医者 of Г. P. ガラトコフ、目をみはるばかりの「若者」の貴族士官学校教師 B. H. リューミン、知的な A. И. ミナエフ (1808~76)、ドイツの軍人クラウゾリット、教育学者 B. И. クラソフスキー、M. B. チスチャコフらであった。この会から大物として出世するのはチェルヌィシエフスキーのみであった。ミリューコフはサークルでは「すばらしい奴」で社会主義的精神でしゃべった、ミナエフはツァーリの残忍さについてまくし立てゲルツェンの著作を朗読することが好きだった、ガラトコフはデカプリストのツァーリに宛てた手紙を持って来て朗読しチェルヌィシエフスキーもそれを手伝った、チェルヌィシエフスキーがこのサークルのなかで一番ラジカルであったらしく、現存秩序の敵は宗教にあるのでなく問題は「政治的・社会的問題」であると力説し、自国ロシアの「変革」について語りあった、と日記のなかでしるしている。彼がヴヴェージェンスキーのサークルをどれほど高く評

働いたかは、1851年1月25日付の友人ミハイロフに宛てた書簡でこのサークルのメンバーを紹介した上で、このサークルに入会することを勧めている点からわかる。彼はヴヴェジェンスキーを尊敬し、彼の『祖国の記録』誌の仕事に積極的に手伝っている。このサークルにおける討論や研究がチェルヌィシエフスキーにどれほどの影響を及ぼしたかについては具体的に挙げることはできないが、彼がレッシングを崇拜者に掲げるのもこの時期だし、なによりも重要なことは、彼が秘密結社と秘密出版を用いて、農民解放と兵役義務解除と租税半減の宣言書や檄を宗務院名で極秘裡に発送して暴動や叛乱を起すといった構想を抱いたのも、このサークルに足繁く出入していた時である。彼はサラトフのギムナジウムで教鞭をとるまでこのサークルに積極的に参加して自己の文学理論、政治理論、歴史理論の研究に余念なかった、このことは、Biese “Die Philosophie des Aristoteles” (1835), W. Humboldt “Über die Kawi-Sprache”, Becker “Organism der Sprache”, L. Blanc “Histoire de dix ans”, J. J. Rousseau “Émile”, W. Robertson の歴史書、エルヴシウスの “De l'Esprit” ジョルジュ・サンド、ホッフマン、ホラチウスのもを通読していることからわかる。

さて残った論及点はチェルヌィシエフスキーの経済学に対する関心である。周知のことだが、『資本論』第二版への後書きなかでマルクスをしてチェルヌィシエフスキーは「ブルジョワ経済学の破産宣告者」と言わせしめた。それは彼の『資本と労働』(1860)『「ミル経済学原理」露訳およびその評言』(1860~61)をさしてのことであろう。彼の第三期の活動をみれば、チェルヌィシエフスキーは立派な経済学者としても浮び上る。彼は「勤労者」の経済学を提唱しそれをもって「資本家」の経済学を論破しマルクスの言う如くブルジョワ経済学の破産を宣告したのである。追って論述することになるがこのことと彼の歴史哲学の性格と内容は深い函数関係にある、つまり彼のブルジョワ経済学の造詣の深さとそれに対する批判と歴史哲学とは密接不離の関係にある。では学生時代にチェルヌィシエフスキーは経済学に関心を持っ

たのか、答えは諾である。彼はハヌィコフからフリーエの『普遍的統一の理論』と一緒にバチスト・セイの露訳『政治経済学教理問答』(1833)を借り、フリーエのそれを読むうちに経済学に強い関心を示し出し、Rossiの『政治経済学教程』(1840)とシスモンディの『新経済学原理』(1827)を手にし、つづいてアドルフ・ブランキの露訳『政治経済学入門』(1826)を読む。経済学書の読後感は、日記のなかにはあまりしるされていないが、1849年11月22日付の両親宛の書簡はきわめて重要なことを述べている、——今日では政治経済学と歴史学はすべての学問の先頭に立っています。政治経済学も歴史学も哲学の応用としてあるのですが、同時に哲学にとっての大黒柱でありかつ源泉であります。いまや政治経済学抜きでは、一步も学問の世界に踏み入ることはできないのです。そしてこれは他の人たちが言うほどに、流行と言ったものではありません。そうではなく、政治経済学の諸々の問題は、本当のところ、今では理論のなかでも実践の上でも、つまり学問のなかでも国家〔社会〕生活のなかでも、最先頭に立っているわけです。チュルヌィシエフスキーは『祖国の記録』誌にくまなく目を通していたので、ペトラシエフスキー会員の経済学者B. A. ミリューチン(1826~55)の同志上の『イギリスとフランスにおけるプロレタリアと社会的窮乏』(1847)『人民の富および政治経済学原理試論』(1847)『マルサスと彼の反対者』(1847)を通読したかもしれない、現にヴヴェジェンスキー・サークルに出入りしている頃後者の論文は話題にのぼっている。そして彼が自己の希望・願望として「プロレタリア、一般に物質的窮乏の根絶」と日記のなかには告白していることとこのことは無関係ではないように思える。そして彼の経済学への強い関心はフリーエの著作によく刺激されたものと思われる。彼の第二期の活動は確かに、芸術哲学、文芸評論に絞られているものであるが、それでも早くも1854年にA. リヴォフ著『富の要素としての土地について』(1853)に書評を加えている。この書評はわずか10数頁のものにすぎないが、学生時代におけるチュルヌィシエフスキーの経済学の知識の成熟度を示していると同時に、第三期(1857~62)で展

開される彼の「勤労者の理論」(勤労者の経済学)、セイ、バスタアの俗流経済学者からのリカード、スミスの古典経済学者の擁護、複雑な経済現象の分析方法としての「仮定的方法」の萌芽をも示唆している。この点で若干この書評に触れざるを得ない。

チェルヌィシエフスキーによれば経済学がかなりの自己の歴史をもつ割合には、天文学や化学や最近の比較解剖学より進歩が遅いのは、客観的原因としては個々の自然科学が諸現象を分離して観察したり分析できたりして精密化しやすいのに反して経済現象は人間生活、社会生活の諸々のものが錯綜として分離して考察すれば一面的になり、真理からそれやすいこと、主観的原因としては、経済現象の研究者の態度そのものが介入していて、研究者の利害感、立場上の見地によって左右されざるを得ないことにある。確かに真理の探求者は真理のみの探求に専心していかなる解答がでるかに恐れてはならないのであるが、しかし経済学者は数学者の如き解答を求め得ない。ただこの立場上の見地と利害感には、俗流経済学者のような国家干渉を排除して個人の自由な経済活動の不可侵性のみを求めある対象研究における偏愛、ひいきのものと、全体や下層階級、人民の立場に立っての善への期待の、厳密な真理への愛に基づいた利害感とがある。勿論、チェルヌィシエフスキーは後者の立場こそ、人民の利益を護る構えこそ経済学者の見地でなければならぬとする。彼は、この点からもわかる様に、学問は階級利害と無関係であるとするエセ客観主義を排除している。したがって経済学は経済現象を「客観的」に記述する学であって忠告を供するものでないという記述主義的性格こそブルジョワ経済学の性格に由来するものとして手きびしく批難する。この点ではリカードの地代論を俗流経済学者セイ、バスタアから擁護し高く評価するも、「リカードの諸結論に反論すべきものはない、しかし、——ここには政治経済学の諸問題がいかに錯綜としているかの証明がある——しかし、この全く正しい問題の解決は彼の最終的解決ではない、何故ならばリカードは問題の特殊な面の一を語っているが推論的判断の部門から出てきた自分の帰結

を現実的な、現代の諸関係の部門に持込まなかったのである」と彼は人民の現実的利害擁護の立場から批判する。彼によれば、リカードは地主の要求だけを念頭において経済現象を考察した。チェルヌィシエフスキーの考えでは、地代という複雑な経済現象はまず単純化して、土地の肥沃度と人口の増加との関係で捉え、その関係なのかで土地耕作者（小作人）の利害を考察しなければならない、こうである、——今仮に他の条件を全部同じとしておいて、Aの田は一反で米十俵、Bは九俵、Cは八俵、Dは七俵とれる肥沃度をもつとする。人口が増えるにつれてB、C、D……の田を耕作することが余儀なくされる、するとAの地主はB、C、Dとの関係において三俵、二俵、一俵余分の収穫をもつ土地をもっていることになる、Bの地主はまたC、Dとの関係で二俵、一俵余分の収穫をもつ土地をもつことになる。Aの地主はDとの関係では小作人に最大限三俵の地代を得ることになる。これから帰結することは、肥沃度の低い土地が耕作されればされるほど、肥沃度の高い土地の地代は高まるということである。土地に肥沃度の高低があり、私的所有が支配している限りこの法則は通用し、耕作者（小作人）には別常何の利益の増大にもならず、むしろ減少につながるのである。以上は簡単な例であるが、生産物年貢を貨幣地代に替えた時には穀物価格と一年間の生活費を計算に入れる、しかし計算が若干こみいってくるだけで結果は同じである。出てくる帰結は、彼によれば、人口が増加すればするほど、肥沃な土地が耕作されればされるほど、それだけ穀物価格は高くなり、それだけ小作人は貧しくなり、それだけ地代が高くなるのである。この方法は後に『「ミル経済学原理」露訳および評言』のなかで、「仮定的方法」として提唱されるものであって、経済現象における多数の要素変数を二三の重要な変数のみにして——先の例であると肥沃度と人口増加——生産物量の増減を調べ、それが生産者自身の利害に関係させて、利をもたらずなら善であり害をもたらずなら悪であるという倫理的判定基準を設けて裁決を下すのである。ここでこの分析方法の是非、有効性、抽象性の問題に深入りはしない、またこの方法によるリカードの地

代論の反論の正否についても詳述しまい。ただここで力説しておきたいことは、「エセ学者」セーヤバスティア、そのロシアの復唱者たるリヴォフらからのリカードの擁護, *lessez faire, laissez passer* 理論の独善的見地の一掃, 記述経済学のエセ客観性の論難, — こういったものの見地は学生時代に既に培われていた被支配者階級へのヒューマニズム的愛によって貫ぬかれていくということである。

この書評を書いて間もなく、つまりクリミア戦争の惨敗によって農奴解放が日程にのぼった時、チェルヌィシエフスキーは『経済指標』誌で一大論陣を張っていたロシアの自由主義経済学者、И. В. ヴェルナツキーとロシアの近代化路線をめぐる熾烈な論戦を展開するのである。彼の諸々の経済学上の論著はこの理論闘争の所産であり、かつこの闘争が、ヘーゲルの歴史哲学の理念的抽象性と打って変わったチェルヌィシエフスキーの歴史哲学に具象性とロシア的色彩をほどこすのである。

#### 使用テキスト

Н. Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939~1953.  
Государственное издательство художественной литературы, Москва.